石井勲の漢字教室

2　漢字による才能開発

Ⅲ　生涯教育としての漢字教育

新しい視点から――固定的な教育を排す



読み先習のすすめ　(1)

卑屈だった日本語観

敗戦直後、国語審議会の委員たちが、「敗戦の原因は、わが国が〝漢字かな混じり文〟という複雑で不合理な表記法を使っていたことにある」と言って、漢字の使用を制限し、ローマ字教育をすすめました。

この考え方は、今では多少反省されてきていますが、それでもまだ「日本語や漢字かな混じり文は劣ったもの」という考え方の抜け切らない人が多いようです。うぬぼれるのはよくありませんが、卑屈になるのも困りものです。うぬぼれは、人から努力する気持を失わせ、卑屈は、人に努力する気持を起こさせません。どちらも発展の大敵です。

ところで、今、道路表示に用いる文字としては、漢字が用いられています。たとえば〝徐行〟という

字を、よく路上で見かけますが、一目見た瞬間に理解することができます。この〝瞬間に読める〟ということが、漢字のすぐれた効用なのです。

この特長は、新聞、雑誌、書籍などを読む場合に、大変な偉力を発揮します。かなやローマ字で書かれたものを読む場合の数分の一の時間で、読み取ることができるのです。時間的に何と経済的なことでしょう。

だから、私たちはひと口に「八時間、書物を読んだ」と言っても、それがかなばかりで書かれている書物か、漢字の多い書物かによって、その書物から得られた知識の量が大変に違う、ということに注目する必要があります。

しかも、それが毎日くり返されるとしたら大変です。長い間には、両者の間に取り返しのつかない大変な差ができてしまうことは、想像にかたくありません。「わが国が、この百年間に、世界に例を見ないすばらしい発展を二度も遂げている理由は漢字かな混じり文にある」と私は考えていますが、その理由は、これでおわかりいただけるかと思います。

今まで、文字の学習というと、読み書き並行学習が当然のことと考えられていて、漢字が読めても、書けなければ全く価値がない、というように見られて来ました。これに対して、私は、この十数年間、読み書き分離〝読み先習〟を唱えて来ました。

その理由の第一は、読みと書きとの実用的な価値の違いにあります。私たちは、漢字が読めなくては、現在の世の中では全く知的環境から遠ざけられてしまい、この日進月歩の世界に生き抜いていくことができなくなるでしょう。しかし、漢字が書けなくても、読めさえするならば、書けないために受ける障害は、読めない場合と違って軽いものです。

毎日の生活を考えてみて下さい。朝起きてから夜寝るまで、私たちはひっきりなしに文字を読むことを余儀なくされますが、字を書く必要はほとんどありません。書く量は、読む量の十分の一、二十分の一にも達しないでしょう。

まれに、書くことを仕事にしている人がありますが、その人でも、読むものは、政治、経済、文化、芸能、スポーツなど、あらゆる面の文字を読むのに反して、書くものは、その一部に限られているに違いありません。とにかく、読みと書きとは、その範囲にせよ、その分量にせよ、大変な違いがあるのです。

このような事実を全く無視して、読める漢字を全部書けるように要求する、今の教育は全く非現実的な教育である、と非難されても弁解の余地はないでしょう。

社会の要求に応じた教育を

もちろん、私は、書く教育を全く無意味であると言っているわけではなく、また、書く教育を否定するものではありません。一字でも多く書ける方が、書けないよりは良いに決まっています。

しかし、読みと書きとは、社会における必要度が非常に違っていて、そのため、読みの能力と書きの能力とが違ってくるのは当然のことです。従って、読める漢字は皆書けるようにしなければならぬ、という考え方は元来無理な考え方と言わなければなりません。私たちの周囲には、まだまだ反省すべき問題がたくさんあるのです。心の目を大きく開いて、見直そうではありませんか。

読み先習のすすめ　(2)

読み先習の論拠

読みの学習と書きの学習とを切り離して、まず読みの学習から進めるべきである、という考え方について、前回は、社会の要求度の違い、必要度の違いの面からこれを説明しました。今回は、学習効果の面からこれを述べたいと思います。

読みは理解行為であるのに対して、書きは表現行為です。表現するためには、その前提として、表現されるものが内になければなりません。

まず、表現されるものが内にあって、次にそれを表現したいという欲望が湧いて、それで表現行為が始まるのです。つまり、十分な習熟により十分な理解ができて初めて、その書く学習の動機が生まれるのです。

だから、今の〝読み書き同時教育〟では、書きの学習が表現行為になるまでにその漢字に習然していないので、単なる〝字形の模写〟つまり、機械的な書き取り学習に終わってしまうわけです。

これでは、ほんとうの書く力にならないのが当たり前です。テストすれば書ける漢字が、作文やノートには使われない、というのは、当たり前のことです。

そうではなくて、漢字の読みから進めて、その漢字の意義や用法について十分な理解を深める間に、字形についての認識を育ててやり、目をつむっても、その字形が頭の中に描かれるようになった上で、書く学習に移れば、今までのような書き取り練習をくり返さなくても、すぐに正しく美しい字が書けるようになります。このことは、実は、十数年にわたって、実際指導を通してすでに実証していることです。

書き取り練習からの解放

このように、読みと書きとを分離して学習させ、十分な読みの学習の後に書きの学習に移らせますと、学習がやさしくできて、しかも書き取り練習の時間を今までのようにたくさん取る必要がなくなります。

今まで、「国語が嫌い」という子どもは、ほとんど書き取り学習が嫌いで、それで国語が嫌いだと言っていたのです。子どもたちを、書き取り練習の苦労から解放してやれば、どの子も国語が好きになり、読書能力がつき、知識も自然と高まります。

書物を読んで、そこに書かれている内容を理解する、という仕事はどんな学科の学習でも、最も基本的で最も大切な仕事です。国語があらゆる教科の基礎教科だと言われるのはそのためです。

言葉を数多く理解している者ほど読書能力が高いので、学習効率が高いわけです。私たちは、今こそ〝読み〟の力の偉大なことを知って、この学習に最大の努力をはらうべきだと思います。

さて、読み書き分離には、もう一つ理由があります。

「鳩」と「鳥」と「九」の秘密

〝鳩〟〝鳥〟〝九〟……この三つの漢字の中で、どの字が最も覚えやすくて、どれが最も覚えにくいか、と言われたら、だれだって〝九〟が最も覚えやすくて、〝鳩〟が最もむずかしいと答えるでしょう。

ところが、文字というものを全く知らない幼児、たとえば三、四歳の幼児にこの三つの字を読んでやりますと、すぐに覚えて読めるようになる漢字は〝鳩〟です。二、二回読んでやれば、たいていの子は

覚えて読めるようになるのが普通です。

一番むずかしいのは〝九〟です。これは、小学校の一年生に、一年間学習させても〝はち〟などと読み違える子どもが二十パーセントくらいあるほどです。

複雑な文字の方が覚える

このように、字形の複雑な文字の方が、印象的であって、記憶に止まりやすいのです。複雑だということは、記憶の手がかりが多いということであり、覚えやすいわけなのです。

ところで、〝書く〟ということになりますと、全く逆になります。最も覚えにくかった〝九〟が最も書きやすく、〝九〟や〝鳥〟が書けて初めて〝鳩〟が書けるのです。

だから漢字の学習は、まず、〝鳩→鳥→九〟という順行で〝読み〟の学習を進め、次に〝九→鳥→鳩〟という順序で〝書き〟の学習を進めるのが最も能率的だ、ということになります。

それで、字形が簡単で覚えにくい、たとえば〝九〟のような漢字は、読み書き同時でもよろしいが、〝鳩〟のような、覚えやすいが書きにくい漢字は、読み書き同時教育では無理なのです。〝九〟や〝鳥〟が書けるようになってから書くなら、すぐに書けるようになります。

幼児の漢字教育　(1)

漢字は三歳児の九五%が覚える

今、全国で、二百余の幼稚園や保育園が、私の提唱する漢字教育を実施しています。幼児教育の世界では、従来「小学校に就学する以前の幼児には、文字は教えない方がよい」という考え方が強く支配していて、「まだかな文字さえ満足に読めない幼児に、漢字を教えるとは乱暴もはなはだしい」と言って非難する人が少なくありません。

確かに、今まで多くの人々が考えていたように、漢字がかなよりもひどくむずかしい文字であるならば、その非難は正しいと言うことができます。しかし、幼児たちにとっては、漢字はかなよりもずっと親しみやすく覚えやすい文字だということが、私の実験によって証明されたのです。

かなは、五歳児で、七〇%程度の幼児が覚えられるだけですが、漢字なら、三歳児でも九五%もの幼

児が学習できて、これを覚えることができるのです。

しかも、三歳から六歳までの四年間が、漢字に対して最も敏感に反応する時期であり、この時期ほど漢字をよく覚える時期は一生のうちでも他にないことが確かめられています。

実験してみますと、この時期の幼児は、全く努力なしに漢字を覚えることができます。ですから、幼児に漢字を覚えさせることは、幼児にとって、少しも負担にならないばかりか、この上ない楽しみでさえあるのです。

今まで、「漢字の学習はむずかしい」と言われてきましたが、そのわけは、漢字を学習させる時期が誤っていたからです。幼児期に学習させたなら、やすやすと覚えられるのに、覚える能力が衰えかかってから学習させているのですから、苦労ばかり多くて、効果はさっぱりあがらなかったのです。

鉄は熱いうちに打たなければなりません。赤熱の鉄は、どうにでも思いのままにすることができますが、冷えてからでは、二倍三倍の力をこめて打ってもどうにもなりません。漢字の学習では、幼児期は、正に鉄の赤熱の時期に当たっているのです。

その意味では、明治以来、百年の教育がまちがっていたのであって、私たち親の世代も、やはり不当な苦労をさせられた被害者の仲間だったのです。



教育漢字の不合理は？

昭和四十六年度から、小学校の教科書が全面的に改訂になります。小学校で学習する漢字も、今までの八百八十一字の教育漢字に、百十数字の当用漢字が追加されて、一千字近くになります。今までですさえ悩まされていたのに、学習漢字がこんなにふえてはたまらないという声も聞かれます。

しかし「(内)閣、警(察)署、裁(判所)、郵(便)局、(県)庁、(牛)乳、卵、胸、腹、背、肩、泣(く)、笑(う)…」—このような日常生活に絶対欠くことのできない漢字が、教育漢字の中にないということで、六年生になっても学習させることができなかったとは、誠におかしなことではありませ

んか。

私は、十数年間、このことを指摘し、これらの漢字を小学校で学習すべきことを主張して来ましたが、やっと認められ、来年からこれらの漢字を六年生が学習できるようになったわけです。

でもほんとは、これらの漢字を六年生で学習させるのではやっぱり遅すぎるのであって、〝読み書きを分離〟して、書く学習は六年生まで延ばしてもよろしいが、教科書にはそれらの言葉を使用する必要に応じて、一年生にでも二年生にでも提出しておいて、読む学習だけは、しておくべきだと思います。

二年間で一千字覚える教育を

幼稚園の漢字教育は、すでに二百余りの幼稚園で実施されていて、その成果は、皆すばらしいものがあります。

二年間で、一千字くらいの漢字を覚えてしまった幼児もいて、新聞でも書籍でも、ばりばり読んいる、という報告が、どの幼稚園からも届いています。恐らく、普通の幼児なら、小学校に入学するころには、小学生向きに書かれた本ならどんな本でも、すらすらと読めて、理解できるようになると思います。

この読書能力を、小学校の六年間に十分に活用するならば、子どもたちはどんなに成長することでしょう。皆さん、ちょっと想像してみただけでも、すばらしい能力が期待できるではありませんか。

知的には、今の中学生以上になることはまちがいありません。

また、漢字学習は、決して単なる知育ではありません。この学習によって、情緒も深められ、意志も磨かれている事実を見落してはなりません。

幼児の漢字教育　(2)

ヴァイオリンの早期指導

ヴァイオリン指導で世界的に有名な鈴木鎮一先生は「音楽家に生まれつきの天才というものはいない。すべて生後の学習によるものである。とりわけ、幼児期の教育による。もしもベートーベンが音痴に育てられていたとしたら、きっと音痴になっていたに違いない。反対に、ベートーベンと同じ環境で同じように育てられるならば、だれだってベートーベンのようになれる」と、確信をもって常に語っていら

っしゃいます。

事実、鈴木先生は、幼児期から、その環境を整えることにより、だれでもすばらしい音楽的才能が育つことを、江藤俊哉、豊田耕児さんなどを育て上げることによって実証しています。

毎年武道館で、鈴木先生の門下生一千人が、大合奏を演奏しますが、その壮観さは全国の皆さんにぜひお見せしたい、お聞かせしたいと思います。

一千人の心が一つに結集して、美しいメロディーをかなでる、その言語に絶する美しさにひたりながら私は考えました。「この美しい音楽を演奏する能力は、鈴木先生のおっしゃるとおり、彼らが毎日美しい音楽を耳にするという環境の中から、自然に育ったものに違いない。とすれば、美しい心を持った人間に育てるためには、幼児期から、美しい人間の心というものを知らせ、それに常にひたらせておくことが必要なのではなかろうか」と。

殺伐たる現代教育

今、大学の数は、戦前の中学の数に匹敵するほど、教育は普及しています。しかし、人間の心は、それに比例して美しく成長しているでしょうか。成長するどころか、戦前には見られなかった醜い心の人間が至るところに充満しているようです。

教育とは、大学を出て、知識が豊かであればそれでよいというものではありません。学校は出なくても、社会のためになるりっぱな人がたくさんいます。これらの人は、りっぱな教養を仕事の中で、生活の中で身につけました。堕落した学校よりも、活気に満ちた秩序ある社会の方が、また、愛と信頼に満ちた家庭の方が、教育的環境としてはずっとすぐれているよい証拠だと思います。

いわゆる教育ママの多くは、競争のはげしい有名校に進学させることを願っていますが、その中には、級友は皆競争相手であり、敵である、と考え、暖かい友情など全くないという殺伐たる学校が多いことに注意をしたことがあるでしょうか。

反対に、大学合格率は悪くても学友がたがいに手を取り合って、助け合い励まし合って学業に努力している、友情に満ちた学校もあります。しかし、このような学校では今のモーレツ社会に適応できる人間にはなれないと考え、これを敬遠する教育ママはいないでしょうか。

殺伐たる学校は至るところにありますが、暖かい友情に満ちた学校は千に一つも存在しないこのごろ

です。しかし、これらはすべて、今の世の親心のあらわれだと私は思っています。世の親の多くが嫌うタイプの学校がふえて、希望するタイプの学校がへる理由がどこにありますか。口先では何と言おうとも、事実として、人々の求めるタイプの学校がふえるのが当り前です。

しかし、いわゆる有名校を出、出世コースに乗ったとして、それで目的が果たされ、幸福になれるものでしょうか。また、親としてそういう子になれば満足できるものでしょうか。

殺伐な学校で、思いやりの心、友情というものを全く知らないで育った者が、ただがむしゃらに働くだけで、家庭を省みず、親の愛情に報いることを知らない人間になっても、それは当然のことです。

現代っ子の心はわからない、と言って嘆く親が多いこのごろですが、現代っ子は今の世の親の心の反映です。親の心の動き、日常の行動が、すべて今の子どもの心や行ないを育てているのです。人間の子どもでさえ、狼に育てられれば、狼のような荒々しい子どもに育つではありませんか。今の子どもが、どんなに悪いものがあるとしても、それは子どもの責任ではありません。親の責任です。

古い昔話の価値を

戦後、私たちは、私たちの心を育ててくれた古い物語を捨ててしまいました。それで、今の子どもは、愛や正義を貫き通す勇気を知らないのです。悪を徹底的に憎む心が育たないのです。花咲じいさん、桃太郎、舌切雀、カチカチ山、猿蟹合戦、これらの昔話は、幼児たちを楽しい世界に引き込んで、日本の心を育てていたのです。

西洋の童話、新しい漫画が絶対にいけないと言うのではありません。ただ、基本に、日本の古い昔話を持って来たいと思うのです。子どもたちに、愛と勇気を奮い起こさせるような物語を与え、読ませ、味わわせることによって、子どもを育てたいと思い、その前提として、〝読書力〟→〝漢字力〟をつけてやりたいと思うのです。

幼児の漢字教育　(3)

「どの子も育つ。育て方一つ」

(2)でお話しました鈴木鎮一先生は、松本市で幼児学園を経営していらっしゃいます。先生は「幼児は幼稚ではない。おとなの及ばないすばらしい能力を持つ幼児に対して、幼稚という言葉の幼稚園という名を付けるのはおかしい」とおっしゃって、幼児学園と呼んでいるのです。そこに、先生の幼児教育に対する考え方が躍如としているではありませんか。

この幼児学園では、早くから私の漢字教育を取り入れて下さっていて、昨年は、招かれて二日にわたって見学もし、子供たちの実際指導もして来ました。

「どの子も育つ。育て方一つ」。この精神で幼児教育に当たっていますこの園では、決して入園の選抜試験をしませんのに、この園で教育を受けた子どもたちは、平均で一六〇というＩＱ（知能指数）を持つ子どもに育っていると聞きました。

子どもたちを、二日にわたって指導しましたが、どの子の顔も皆生き生きと輝いていて、質問にも活発に応じ、まことに指導することの楽しさを味わわせていただきました。次から次へと、どんな漢字を提出していっても、その場でたちまち覚えてしまい、翌日試してみますと、ちゃんと覚えていて、すらっと読んでしまいます。頭の働きが鋭敏で、学習に常に興味と関心とを持って臨んでいますので、いっぺんで覚えてしまうのです。

ほんとに働きのよい頭は、何事に対しても新鮮な気持で相対しますし、強い関心を持って漢字を観察しますので、よく記憶できるのだと思います。

漢字は教えるものではない

ところで、私の漢字教育では、「漢字を教えようと思ってはいけない」という戒めがあります。子どもが漢字に関心を持たない限りどんなに教え方のうまい先生でも、子どもに漢字を覚えさせることはできないからです。

実は、教え方のうまい先生とは、子どもの心をあやつって、自分の計画通りに子どもの心を引っぱっていくことができる先生のことです。決して、学識の高い低いには依りません。

親が子を教える場合、一番ありがちなことで一番いけないことは、すぐ〝夢中になる〟ことです。夢中になってよいのは子どもの方であって、教える親は、常に冷静でなければなりません。

ところが、たいていは親の方が子どもを勉強させることに一生懸命になって、子どもの方は少しも一生懸命になりません。

このごろは、ヴァイオリンやピアノのおけいこが盛んですが、子どもがそれを習いたいと思うよりも、親が子どもにこれを習わせたくて習わせている、という場合が多いようです。これでは成功するはずがありません。

鈴木先生は、子どもが習いたくてたまらなくなるまでは、ただ見学させるだけで、絶対に楽器に手を触れさせないそうです。子どもがどうにも弾きたくてたまらなくなった時、「では、先生の言いつけを守るという約束ができるなら、弾かしてやりましょう」と言って許しますと、子どもは、苦しいはずのきびしい練習にもりっぱに耐えて勉強するようになるそうです。

ちょうど、飢餓状態にあった人間が食べ物にありついたようなもので、どんな物でもおいしく有難くいただけるわけです。反対に、満腹の時は、御馳走を口に押し込んでも、猫でさえ食べようとはしません。

幼児にまず〝関心〟を持たせる

心からしたいと望まないことには、幼児は努力できないのです。ところが、たいていの親は、子どもの心の動きに頓着なく、親の意志を子どもに強要するのです。子どもがこれを受け入れるはずがありません。

幼児というものは、元来、貪欲なくらい学習意欲に燃えているものです。だから、環境に漢字がうまく用意されているならば「これなあに」といって、うるさいほど質問し、一度尋ねて教えられた漢字はその場でたちまち覚えてしまうものです。

これは、おとなには全く想像もつかない、また、及びもつかない能力です。

幼児の教育は、教えようと思うものにその関心を向けさせることが大切で、関心がそこに集中されさえすれば、あとはもう何もしてやることはありません。

こうして漢字をたくさん覚え、書物が読めるようになれば、自然と読み物を意欲的に読むようになり

ます。書物を読むことの楽しさを理解します。そうすれば、文字を通して、人の心の美しさにも触れ、これを 理解して自分の心の糧とし、情操豊かな人間に育つはずです。私の漢字教育の目的はここにあるのであって、漢字そのものの習得にあるのではありません。

幼児の漢字教育 (4)

私は今、幼児開発協会の仕事にも関係していますが、この協会は、ソニーの井深大氏が、鈴木鎮一先生門下の幼児たちが余りにも見事にヴァイオリンを演奏するのに感激され、幼児の能力の偉大さと、この時期の教育の重要性に気づかれたのが動機で設立されたものです。

昭和四十四年、財団法人として認可されたばかりですが、すでに大田区に新築されたビルに幼児開発センターが開設され、幼児教育のための運動と実践が開始されました。

家庭の若いお母様方向けに、機関誌〝幼児開発〟が発行されていますが、これは有益な本ですから、本誌の読者の皆様にもお奨めしたいと思います。

漢字教育の実践例

さて、このセンターで、先日、会員の方々といろいろお話をした際に、大変おもしろいお話をうかがいました。それは、都内で開業医をなさっている方ですが、もうすでに何人ものお子様を育て上げられ、医院の方は御長男にお任せになっていらっしゃる方です。

この方のお子様の教育が、すべて「幼児期からの漢字教育」だったのです。それは正に石井方式以前の石井方式、漢字教育だったのです。小学校に入学しないうちから、漢文まですらすら読めるほどに、〝読む〟教育を徹底的になさったそうです。

だから、小学校に入学してからも、読書欲が旺盛で、程度の高い書物にどんどんと食いつき、知識は幅広く深いものになっていったのです。

しかし、学校の成績は必ずしもそれに伴わなかったそうです。今の五点評価で言えば、三か、せいぜい四がいくつか混じる程度で、クラスでは中、あるいは中の上といったところだったということです。けれども、学校の成績には頓着せずに、好きな読書を自由に伸ばすことの方に気を配られたそうです。つまり、家庭では、学校の勉強の復習よりも、自由な帽広い読書の方を重んじたのです。

すると、中学、高校と上級に進むにつれて学校の成績も上位に自然に移って行ったそうです。もちろん、学校の勉強に特別に力を入れるようにしたわけではありませんのに、次第に上位に移って行ったのです。そして、皆さんそろって東大を卒業されたのです。

読書能力と学校の成績

昔から、「本立って道生ず」と言われているように、基礎が固まりますと、あとは自然に着実な発展を遂げて、最初は回り遠いように見えますが、結局はそれが成功の最短距離を歩んでいることがわかります。

このお医者さんのお子様に取られた教育法は、学問の基礎である〝読書の能力〟を養うことこそ、成功の最短距離であるとお考えになったところにあり、しかも、そのことをりっぱに実証なさったものだと思います。

ただここで、着目していただきたいことは、幼児期に読書能力が高くなったと言っても、それがすぐに学校の成績に影響するとは限らない、ということです。

多くの場合は、読書の効果は学校の成績にすぐにつながらないのが普通です。なぜなら学校で得た知識だけの子どもは、一本道を進むようなもので、迷いなく正答にぶつかることができますが、広い読書によって豊かな知識が身についている子どもは、いくつもの道が見えますので、それを一々検討して容易に正答に達することができないからです。

しかし、それだけに、普通の子どもよりも一層判断のために頭をよく使いますので、頭の働きはますます良くなっていき、最後の成功をつかみ取るわけです。

速効型の教育は避けよう

だから、教育というものは、目先にとらわれずに長い目で見ることが大切なのです。

ところが、世のお母様方の多くはせっかちで、速効を望みます。しかし、教育には速効はほんの一時しのぎか外見を良くするかに過ぎません。

たとえば、〝知能訓練〟と称して、知能テストまがいのことを練習させているところがありますが、その結果確かに知能テストの成績が良くなり、ＩＱ（知能指数）が上がります。しかし、ＩＱは言わば

寒暖計の目盛りですから、寒暖計に息を吹きかけて目盛りが上がったから暖かくなったと喜ぶようなもので、ＩＱの向上が知能の向上そのものではないことを知るならば、このような訓練がいかにつまらぬものであるか、わかっていただけると思います。

結局、速効的な効果のある教育法は、うまくいっても一時的に学校の成績を向上させるだけで、多くは有害と見た方が無難です。それよりは、先のお医者様のように、学校の成績にこだわらず、真の能力を養うことに努力すべきです。

しかし、このことは決してやさしいことではありません。つい目先の成績に一喜一憂するのが人情です。だが、この人情に流されてはいけないのです。

幼児の漢字教育　(5)

菅原道真は天才か?

わが国第一の学者と言えば、まず最初に挙げられるのは、菅公菅原道真でしょう。菅公は、三歳ごろにはすでに漢文がすらすらと読める天才であった、と伝えられていますが、私は、これについては、次のように考えています。

三歳で書物が読めるということは、実は、私の実験によれば、天才でなくとも、〝だれにでもできる〟ことなのです。しかも、この時期における読書は、子どもの頭の働きを活発にし、知能を高めることも、すでに科学的に証明されています。

つまり、管公は、「天才だから、三歳で書物が読めた」のではなくて、逆に、「三歳から書物を読んだので天才になれたのだ」というのが私の見解なのです。

大脳神経細胞は生後三年間に

最近の生理学では、人間の思考活動を司る大脳の神経細胞は、生後の三年間に、成人の半分くらいのところまでで き上がる、と言われていて、この時期の幼児の、摸倣し吸収する能力は、驚くほど高いのです。

与えられるものは、まるで乾いた海綿が水を吸収するように、何の抵抗もなくこれを吸収して成長するのです。

余りにも当り前すぎて、人は考えてみようともしないのですが、「言葉を覚えて、これを使う能力を発達させるのは、生後の三年間である」ということに、私たちは注目する必要があると思います。

つまり、この時期は、「物を吸収する能力が、一生のうちで最も高い時期なのだ」ということで、この事実を、私たちは漫然と見過ごしてはなりません。

おとなが外国語を学ぶ時には、その国に十年間住んでも、なかなかその国の人のようには話せるようになりません。ところが、幼児は、半年もしないうちに、その国の人と全く同じように微妙なアクセントでも、幼児はたやすく覚えて、それをそっくりまねすることができますが、おとなには、どんなに努力しても、このまねはできません。

おとなは、幼児期におけるこの能力を、正しく認識することが大切です。そうでないといくら努力しても、効果ある教育はとても期待できません。

というわけは、この能力は、それが芽ばえるころから数年の間に、その能力をできるだけ使うようにしないと、その能力が発達しないばかりか、全く失われてしまうことがわかったからです。

また、最近明らかにされたことですが、聴力のようなものでも、生後、母親などの声を耳にすることによって次第に発達するものであって、いろいろな声を聞き分ける聴力が、初めから備わっているのではないのです。

たとえば、今までなら、先天的なつんぼと言われる者でも、多くは、単に聴力が普通より少し劣っているというだけのことであって、ただそのために聴覚的刺戟の受け取りが普通の人より少ないために、聴力が育たず、従って、いわゆるつんぼになるということがわかったのです。

だから、早期にこれを発見して、聴覚的刺戟を普通よりも強く与えることにより、聴力を発達させ、正常なものに引き上げることができるのです。

人間の能力は育てるもの

つまり、人間の能力は、初めから完成しているのではなくて、それを使うことによって育てていくものです。適切な刺戟を与えてそれに反応させることを反復練習させるならば、人間としてのすばらしい力が育つのです。

ただ、その能力を育てるためには、それに適した時期があるのであって、その時期を失ったら、どんなに努力しても育たなくなってしまうことを忘れてはなりません。

現代の科学は、このように、人間のいろいろな面をそれぞれに深く掘り下げて追求し、次第にこれを明らかにしています。私たちはこの明らかにされた事実に従い、より有効な教育法を考え出し、これを勇敢に推し進めていくべきだと思います。

人は、新しいことを実行する場合には、常に危険を感じてためらうものです。しかし、ためらっている限り前進はあり得ません。

一歩進めば、それだけ今まで見えなかった世界が見えて来ます。その時、危険だと知ったら退けば良いのです。そうでない限りは、一歩、一歩、慎重に前進すべきです。そういう態度で人類は今の文化を築き上げたのであって、私たちは、やはりその道を歩む義務があると、私は思うのです。

進学の意味 (1)

エリートコースというもの

〝学閥〟という言葉があります。これは外国にはない言葉ではないでしょうか。もっとも、学閥の〝閥〟には、閥という言葉が示すほど強い意味があるとは思えませんが……。

それにしても、エリートコースというものがあって、たとえば、東大に進むためには日比谷高校、その日比谷高校に進むためには麹町中、またそれに進むためには永田町小、または番町小というコースのような最も進学率の高い学校に争って入学させようとする傾向がいまだにあることは、わが国特有の現象だろうと思います。

これは、日本人が非常に敏感で、頭の働きがよく、しかも行動的であることの表われだとは思いますが、決して良いことではありません。

秀才校の生徒はすべて秀才か？

わが国の古い諺に、「朱に交われば赤くなる」と言われていて、秀才の多い学校に入れさえすれば、どんな能力の者でも秀才になれるように考えている人が、今の日本には多いようです。

しかし、この考えはまちがっています。以前、日比谷高校の教師をしていた私の親友がよく語ったものです。「この学校の生徒の三分の一は、別の高校に進んでいたらもっと伸びたろうに、と実に残念に思われてならない」と――。

日比谷高校に入学するくらいの生徒は、中学では必ず一、二を争った成績の良い生徒に違いありません。しかし、どんなに選ばれた生徒の集まりでも、その集団の成績が均一化することは決してありません。学業が進めば進むほど、差が開いていくものです。長距離レースを見てごらんなさい。最初は集団になって走っていますが、激しいせり合いが僅かの間続き、そのせり合いに勝った者は快調に走り続けますが、負けた者は見る見る離されて、やがて落伍する者さえ出て来ます。

昔、私が教頭をしていた中学で、能力別のクラス編成をしたことがあります。仮に二百人の生徒がいるとしますと、一番から五十番までの成績の者がA組、五十一番から百番までの者がB組、百一番～百五十番がC組、百五十一番～二百番がD組となるわけです。

この編成によると各クラスが能力的に均等化され、指導がしやすくなり、学習効果があがる利点があります。しかし、その反面、各クラスの下位の成績の生徒、たとえば、A組の五十番及びこれに近い生徒、B組の百番及びこれに近い生徒……たちは、目に見えて学力が低下していきました。

能力別クラスの欠点

その代り、B組の五十一番及びこれに近い生徒、C組の百一番及びこれに近い生徒、とりわけD組の百五十一番の生徒など、今までクラスの下位にあって全く目立たぬ存在であったものが、この編成により、クラスの最優秀生徒となり、クラスの指導的立場に置かれて、自信を持つと共に驚くほど学力の進歩を見せたものです。

このクラス編成は、私の提案で、その効果については自信をもって実行したものですが、各クラスの下位に振り分けられた生徒の学力の低下のひどさにはすっかり驚かされてしまい、この試みは一年だけで止めてしまいました。人間というものは、人々に認められると自信がつくと共に実力がつくものであ

り、反対に人々に無視されると、自信を失い伸びるものも伸びなくなるものです。

自信が能力を伸長する

だから、日比谷高校に行ったために霞んだ存在になり、自信を失って成長が止まってしまうということは、私にはよく理解できます。事実、こんな実例もあります。それは、中学ではいつも一番という生徒で、都立の三流校に進んで入学した者です。

その生徒の父親は学校長を勤めていた人で、子供の体力が強健ではないので、勉強のきつい一流校ではかわいそうだから、遊んでいてもトップクラスにいられる三流校を選んだというわけです。

さて、その高校では、創立以来第一の秀才が入学したというので教員室の評判になり、先生方の期待を一身に背負って勉強することになり、結局、国立の一流大学にストレートで入学しました。

一流高校でも、僅かに上位の者しか入学できないという一流大学に、三流高校から入学したのです。恐らく、その生徒が一流高校に学んでいたら、これほどうまくはいかなかったでしょう。三流校で、自信をもって伸び伸びと実力を養ったために、能力を十分に伸ばすことができたのだと思います。

一流校に入学できて、そのための自信は得られたとしても、毎日、毎時間、劣等感を抱かされ続けたら、人間はだめになってしまいます。それよりは、三流校で、そのための劣等感を抱かされたとしても、毎日、毎時間の学習で自信をつけられることの方が大切なのです。なぜなら、毎日、毎時間の学習によって人間は成長するものだからです。その毎日、毎時間の学習に自信をもってやるか、劣等感をもってやるかが、成功と失敗とを分けているのです。

それに、人間というものは、ある種の劣等感が向上の動力として必要なのです。前者の場合のように、自信を失い、努力する意欲を失わせるような劣等感では困りますが、後者のように、劣等感があって、これを別の面で補おうとして、初めて大いなる努力が払われるのです。世の大きな発明発見や、偉人の立身出世の原動力は、たいてい何かの劣等感を補おうとする努力であることがわかります。

だから、私は、あえて一流校に進学することに価値を認めません。一流校で悠々一番になる実力の持ち主ならばよろしい。ついて行くのにせい一杯だというなら、三流、四流でもよい。悠々とやれる学校で勉強することをおすすめします。三流四流でも悠々勉強できないようなら、学校へ行くことを止めるべきです。なぜなら、今の学校は、どんな人でもその能力を伸ばしてくれるようにはできていないから

です……。

進学の意味　(2)

学校と言えば、私が中学生のころは、一つの小学校から中学に進学できる者はせいぜい二人か三人しかいなかったものです。私の住んでいた山梨県には、当時、中学がたった五つしかなくて、その定員は五つ合わせても六百人でした。

ところが、今では、山梨県内に大学だけでも五つ以上はありましょう。従って、大学生の数が、昔の中学生の数よりもずっと多いのです。ことによると、今の大学生の数は、昔の中学生の十倍もあるのではないでしょうか。ともあれ今の学校教育の隆盛には驚くほどのものがあります。

学校教育は真に隆盛か？

しかし、この学校教育の隆盛も、そのまま素直に喜べないものがあります。「山高きが故に尊からず」で、学校の数が多いだけで、教育が盛んだとは言い切れないからです。

学問が嫌いなくせに大学に進みたがり、大学に入りながら聴講しようともしない学生が何と多いことでしょう。彼らは、ただ卒業証書を手にすることだけを目的にしているのです。

このことは、大学生自身に、学問に対する情熱のないせいもありますが、今の社会の人間評価の仕方にも責任があります。ただ大学を出たか出ないかで、安易に人間の価値を決めようとしたり、また、その大学にもいろいろの格差をつけて、人物を．見ることよりも、出身大学によって人間を評価する傾向があるからです。

ただ大学を出たからりっぱな人間になれるのではなく、そこで学問をし、修養をするからりっぱな人間になれるわけで、ただ授業料を納め卒業証書を手にしさえすれば、りっぱな人間になれるというわけのものではありません。

そんなことは、わかり切ったことですのに、大学を出たというだけで社会がこれを優遇するものだから、未熟な青年が、それに応じて、卒業証書というレッテルだけを求めるようになるのです。

外装よりも内容を

教育というものは、大学というレッテルがなくても、また広大な建物や整った設備がなくても行なえるものです。吉田松陰が開いた松下村塾はその良い証拠です。外装よりも内容が問題です。

ところが、今は内容よりも外装を問題にする人が多くなりました。よく、上げ底の土産品が問題にされますが、これなども、今の多くの人たちが、見かけだけを必要以上に重んずることから生じた弊害であることを知らなければなりません。

「だます者は勿論悪いが、だまされる者も悪い」のです。外見だけにとらわれる人がいなかったら、こんな上げ底を作る商人はいないはずです。だから、上げ底を作る商人を責めても問題は解決されないのです。買い手が実質を重んじて外装にとらわれなければ、上げ底は必ずなくなります。

それと同じように、大学をレッテルと考える若者たちだけを責めるのはまちがっています。若者たちを雇傭する社会が、レッテルよりも、人物本位の見方をするようになれば、自然とこのような風潮もなくなるはずです。また、そうならなければ、この世に真の進歩発展は望めません。

私は今、幼児教育の重要性を説き、できれば、「一年早めて五歳から」と言わず、「三歳からの集団教育」を希望し、計画していますが、今の世の多くの人々の、安易な〝学校教育万能〟的考え方では、その実現にためらいを感じます。正しい学校教育は、一年でも早く始めるに越したことはありませんが、誤った学校教育なら、早く始めれば始めるだけその害も大きくなるからです。

昔から、「国家百年の計は教育にあり」と言われていますが、それはお題目だけで、その意味内容があまり深く考えられていない憾みがあります。しかし、国家社会の真の発展、国民生活の真の平和、というものの基礎は、実に教育の成果いかんにかかっているのです。

このことは、先般、インド及び東南アジア諸国を歩いてみて痛切に感じました。日本にいては感じませんが、外国に出かけて、教育の遅れている国に住む人々に接しますと、この文化の遅れをとりもどすことは、容易ではないことを痛感させられます。それは、全く教育のないことによります。

後進国にみる〝教育〟の意味

学校教育の貧弱なこともさることながら、家庭教育のないことです。生活の窮迫が、教育を考える余裕をなくしているといえばそれまでですが、私には、それだけではないものがあるように思われました。

たとえば、日本なら、どんなに困っても、わが子だけは「できるものなら教育を受けさせたい」と願わない親はないでしょう。またどんなに悪いことをしている親でも、わが子だけは正しくりっぱな人間になってほしいと願うでしょう。ところが、それがこれらの国々ではほとんどうかがえないのです。

だから、私は、これは大変なことだ、これは経済だけで片づく問題ではない、と痛感したのです。その意味では、学校教育が過大評価されすぎているわが国の世相を、どんなにか有難く思ったことです。

教育の本体は親の責任に

しかし、それはともあれ、教育というものを、真底から考え直してみる必要はあると思います。私は、教育の本体は、親が責任を以て行なうべきものだ、と思います。

今では何もかも学校に任せて、親はその資金を出すだけくらいに考えていますが、学校教育の効果は、家庭教育の効果に従って増減するものだ、と私は思っています。とりわけ、物の見方、考え方などは、親の日常生活がこれを育てているのです。

だから、家庭で養われた物の見方、考え方で学校生活が営まれますので、同じ教育を受けても、それぞれが違った受け取り方をし、違った人間に育つのです。ただ学校に任せておけばよい、というものでは決してありません。

家庭の教育　(1)

「人に助けてもらいたい、などと願ってはならない。人を助ける人になることだ」

「人にだまされることは愚かなことではない。しかし、人をだますことは愚かな行為である」

これらの言葉は、今の私の生き方の指針の一つになっているいものですが、この考え方は私が子供の時から、父母の生活を見ている間に、自然と学び取ったものです。私の両親は「うそを言ってはならない」「人の物をとってはならない」ということだけはよく言いましたが、それ以外は、「何々せよ」とか「何々してはならぬ」とか。あまり言わない人でした。

それだけに、「不義にして富貴なるは、浮雲のごとし」という論語の言葉通りにこの世を生き抜き、人にだまされることを恐れず、ただ人に援助を与えることだけに喜びを感じて生活し、それだけに人々



から、心からの尊敬を受けていた両親を毎日見ているうちに、自然と私の心に育ったものと思います。

昔から、「親を見れば子がわかる」とも、「子を見れば親がわかる」とも言われていて、親と子はその言動が不思議なほど似ているものですが、それは、このように、毎日子は親を見てその影響を受けているからです。

前にお話したことがありますが、人間としての思考を司る大脳の神経細胞は、大半が幼児期に完成します。環境から受ける刺激に対する反応の仕方は、すべて模倣によって養われます。だから、わが子がりっぱな人間になってほしいと思う親は、まず自信がりっぱな親になり、りっぱな手本を示さなければならないわけです。

親には向上心がないのに、子どもだけにこれを求めてもそれは無理です。親はいつもテレビを見て遊んでいるのに、子どもには本を読みなさいと要求しても、効果はないでしょう。

親が読書好きで、いつも本を読んでいるならば、「本を読むな」と言っても、書物を好んで読む子供になるものです。こうして、子どもが親に似るからこそ、お互いに心がすぐ通い、理解しあえて、ともに幸福になれるのではないでしょうか。

子を見れば親がわかる

親が下品なのに、子どもだけが上品になってしまったのでは、親と子の断絶が増すだけで、これでは親も子もどちらも幸福とは言えないと思います。たとえ、親の地位が低く貧乏であっても、向上心があってそのための努力を常に惜しまない人間なら、子供がどんなに立身出世しても、親子の断絶がなく、楽しい会話が交わせましょうが、向上心のない親ではお互いどんなに合わせようとしても合うはずがありません。これでは出世した子どもにとってもまことにさびしく、共に不幸なことと言わなければなりますまい。

私は、若い母親の集まりで、子供の教育について語る時に、「わが子が出世すると、〝とびが鷹を産んだ〟と言って喜びます。しかし、それがほんとに幸福であるためには、親も鷹になる努力をしなければなりません。子どもが鷹で、親がとびでは、親も子も不幸です。鷹になる努力もできない親は、とびを産んだ方が幸福です。無理して一流大学にやるのは不幸のもとです」とよくお話して、皆様の苦笑を買っています。しかし、これが真実ではないでしょうか。

家庭教育の忘れもの

学歴のない親ほど、子どもだけは一流の大学にやりたいと思うのは、親として自然に持つ愛情だと思います。しかし、とかくただ一流の大学を卒業させたいという気持ばかり強くて、道徳や情操面の教育がなおざりにされがちです。昔に比べて今の大学生には、教養のない、公徳心に欠けた学生が多いのは、その現れだと思います。

今の入学試験は、詰込み知識の多少が及落を左右するというので、人間を磨くことよりも知識を詰め込むことに夢中になっている人が多いようです。しかも、競争相手が多いので、爪先立ちしてでも、人に抜きん出ようとしています。

そうではなくて、自分の望む学問をマイペースで進め、入試に合格するもよし、落第するもよし、及落によってわが人格が上下するものではない、そう考えて淡々とした気持ちで入試に臨んでもらいたいものです。

正確な寒暖計が気温を正確に表示するように、いまの入試が受験生の学力を正確に測定できる、と考えていらっしゃる人は一人だっていないでしょう。それどころか、まるで狂った寒暖計のような入試が多い、と考えていらっしゃる方がほとんどだと思います。

親の生き方と子ども

そんな狂った寒暖計で気温を測るような入試を行う大学に、人生のすべてをかけるようでは、貴重な人間の生命が泣きます。どの大学に入学できたかは、問題ではありません。大学で、どのように学問するかが問題なのです。

このような考え方が、学校教育に先立って必要な考え方です。こういう物の根本から考える考え方こ

そ家庭で作られるものであり、また、作らなければならぬものだと思います。それは教えようとして教えられるものだとは思われません。親たちが、安易な考え方に流れず、常に真剣に物事に立ち向かう態度で暮らすならば、そこに成長する子どもは、ひとりでに親の見方考え方を吸収し、親に似た子どもになるのだと思います。

これが家庭教育という物であり。子どもにとっては最も大切なものだと思います。これが教育の土台であり、これが不十分だったらどんな一流大学に学ばせたところで、砂上に楼閣を築くようなものです。

反対に、この教育さえ十分に行われたなら、大学に行くいかないは大した問題ではありません。まして、大学のレッテルなど問題になりません。社会に役立つ、人々から尊敬される何事かをきっと成し遂げるに違いないと思います。

家庭の教育　(2)

私の父は酒も煙草も好きで、ことに酒は毎晩欠かしたことがありませんでした。来客があると、それに事寄せてふだんより余計に酒が飲めるのを楽しむ、という風でした。

ところが、その子どもの私は、酒も煙草も嫌いで、煙草などはまだ一度も口にしたことさえないほどです。その理由は、父が「お父さんは、自分が吸っている煙草を、お前に吸うなとはいわない。でも、これは習慣で、自分ではつまらぬものだと思っても止められないのだ。それに、煙草は初めからうまいと思って吸えるものではない。初めこんなつまらぬものを口にしたばかりに、今はもう止めようとしても止められなくなったのだよ」と、自身を責めるようにしみじみと語ったのが、今も脳裡にあるからです。

それは決して強烈な印象ではありません。頭の片隅に置かれた程度のものです。しかしそれだけのことで、私は、煙草を口にしてみようという気が少しも起こらないのです。酒を飲まない理由は、これと全く違っています。酒を飲まない時の父、とりわけ改まった時の父には、よく甘えた私でも近づきにく

いほどの威厳を感じさせるものがありましたが、酒を飲む時の父には、これがあの父かと思うほどの態度の崩れが見えました。

泥酔した父を見たことはありませんが、酒を心から楽しんでいる父の姿からは、父らしいいつもの威厳が見えず、それが若い私にはさびしく思えました。「父は何であんな酒を楽しんでいるのか」といぶかると共に「私はあんなものは飲まないぞ」と思ったものです。

父は、常に酒を〝百薬の長〟と誉め、私にも飲むなとは一度も言ったことがないのに、私は、このように酒嫌いになったのです。

真剣に生きる姿をみせよう

家庭教育というものは、子どもに「……せよ」「……するな」と言うことではなくて、真剣に生きる親の姿をそのまま子どもに見せることであり、時に自分の真情を子どもに吐露することだ、と思います。「するな」と言われれば、逆にしたくなるのが人情です。父が、煙草を吸いながら「お前は吸うな」と言われたら、私も煙草を吸うようになったかも知れません。

また、良い悪いは親に教えられなくても、自然とわかるもののようで、酒乱の親を持った子どもはたいてい酒嫌いになっているのはそのためだと思われます。

ところで、二十四歳になる私の長男は、このごろ酒も煙草もやっているようです。これは、私がやらなかったために、これに対する批判力が育たなかったせいだ、と私は考えて自分を反省しています。

私の父のこと、それから私がなぜ酒や煙草を口にしないか、について私の経験を子どもに物語っていたならば、子どもも、私と同じように酒、煙草を口にしなかったのではなかったか、と考えられるのです。

さて、このように、家庭教育というものはそれぞれの世代における経験から、知恵を引き出してそれを次の世代へ伝えることだと思います。その意味では、私は、自分の経験に十分な考察を加えて知恵を引き出すことを怠り、従ってこれをわが子に伝えなかった「親としての資格に欠けた」親と言わなければなりますまい。

昔の家庭教育の再確認を

昔の親は、こういう教育のほかに、その家に伝わる職業教育をもしていました。私は、このことについて、もう一度新しい眼で見直す必要があると思うものです。

昔は世襲制度、今は職業選択の自由な時代なのだから、それは時代錯誤ではないかとおっしゃる方もあろうかと思います。しかし、親の仕事を受け継ぐことくらい、子どもにとって有利な条件の仕事はないではありませんか。

家内工・商業の場合は、子どもが毎日その生活の中から、その面の知識を自然に吸収することができますし、教師や官公吏の場合でも、その面の参考図書などが家にあり、それに親しむ機会があって、子どもがその親の仕事を受け継いだ場合には、親は、三十年にわたる体験から得た知恵により、子どもに適確な助言を与えることができるのです。

ところで、職業選択が自由になった明治以後は、それまでの世襲の反動として、世襲の良い面さえもすっかり捨て去り、職業は子どもの全く自由な選択に任せるべきものとなってしまいました。

私の父もそうでしたが、私も長男の職業選択にそうでした。親の職業に関係なく、全く子どもの自由な選択に任せるのが理解ある親の態度だと信じていたのです。その結果、長男は、私と道を異にして機械工学を選んだのです。

子どもの職業選択と親

子どもが、多くの点で親に似ているとすれば、当然、職業の点でも親が得意なら子どもも得意になるはずで、子どもは親の職業を受け継ぐのが最も有利なはずだ、と気が付いたのは迂闊にも次の長女の大学進学が問題になった時です。ある時は医者になりたいと言い、ある時は小説家になりたいと言い、文学は英文学をやりたいと言い、また、ドイツ文学をやりたいと言うのを、いつもそのまま容認していました。

しかし、高校の成績は、特別に勉強しているのでもないのに、私の専門である国語漢文がずば抜けて良いのです。私ははっと思いました。「今までどうしてこんな平凡なことに気が付かなかったのだろう」と。

そして早速娘と話し合いました。娘も簡単に理解してくれました。今、娘は、大学で私の専門と同じ

中国文学を学んでいます。この道が、娘にとって最も有利な職業であることは言うまでもありません。私にとっても、百万の味方を得た思いがします。やはり、この世の中で、だれよりもこの娘が、私の学問と私の思想もよく理解し、受け継ぎ、発展さ せてくれるだろうと思います。

家庭の教育　(3)

自信喪失で弱気になった親

口で説くよりも、行ないで理解させることの方が大切ではありますが、口で説くことも事により、時によっては必要なことです。親の頭では、こんなことは当然わかっているだろうと思うことが、経験の乏しい子どもには理解できないことがよくあるものです。

それで、親はかんかんになって子どもの行為を怒っているのに、子どもの方は、親が何で怒っているのかさっぱりわからない、ということがよくあるのです。こういう意味では、世代の断絶はいつの世でもあったと思います。

しかし、今の世の中には、この世代の断絶が余りにもひどいように思われます。その理由は、今の親は、昔のように子どもを口やかましく説教することがないからだと思います。

敗戦のショックと、新教育の到来とで、教育の基盤が失われ、従来のものに代る教育の新しい方針が立たず、従って無為に過ごしている、という例が多いのです。

また、このようにして自信を失って弱くなった親は、へたに叱って子どもに恨まれるよりも、物わかりの良い親として子どもに喜ばれる方がよい、と考えるようになったこともあるように思われます（ここに、スパルタ教育の復活を唱える理由、また、これに賛成する声が高まっている理由があります）。

しかし、これとは別に、幼児は未来に無限の可能性を秘めているものであるから、おとなの考えを一方的に押しつけることは、幼児の成長を抑え、幼児を小さく固定してしまう恐れがあるのでいけない、と説く人があります。そのために、幼児の自主性を尊重するという美名の下に、実は幼児を放任しているものが少なからずあります。

いずれにせよ、無為や放任は、人間が、その長い歴史の間に積み重ねて来た知恵を、軽視することであって、愚かな行為と言わなければなりません。

自己の経験から得た知識を伝えよう

人間が万物の霊長と言われ、他の動物と一線を画すことができるのは、他の動物がその世代の経験を次の世代に伝える能力を持っておらず、従って、その貴重な知恵が一代限りで終り、蓄積されなかったのに対し、人間は、自己の経験から得た知恵を次の世代に伝えることができたために、代を重ねるごとに知恵が蓄積されていったからです。

この長い世代にわたって受け継いできた知恵を子どもに伝えないならば、子どもたちは、言わば原始の時代に生まれたのと同じことであり、零から出発することになるではありませんか。こんな愚かなことはないでしょう。

子どもの言うことや、することをよく見ていますと、すべて何かの模倣であることがわかります。この模倣の能力にかけてはどの子どももすべて天才であって、どんなにへたな子どもでも、おとなよりははるかにすぐれているものです。

しかも、子どもは、模倣がうまいというだけではなく、模倣が好きで好きでたまらないのです。心から楽しんで模倣するのが子どもの天性だ、と言ってよいでしょう。それだからこそ少しの努力も払わずに、いろいろな能力を身につけることができるのだと思います。

たとえば、言葉などは、生後の三年間（と言っても、最初の一年間は、ほとんど無能に近い状態で学習しているのです）に、母国語の根幹となるものは、完全に身につけてしまいます。

これがおとなたったら、十年かかっても、とてもこれだけのことはできません。それは、学校の英語教育を思い出してみれば、すぐわかるはずです。

私たちは、今まで、この能力を当り前（事実それが当り前ですが）のこととして、だれ一人として驚いたものがいなかったのですが、よくよく考えてみますと、この能力というものは、驚くほど実に偉大な能力だということができます（最初に、この言葉を習得する幼児の能力の偉大さに驚いた人は、今、ヴァイオリンの指導で名高い鈴木鎮一先生でしょう。先生は、今から半世紀近く前、この事実に驚いたことが、今世界的に有名な鈴本式指導法を発見される動機になったということです）。

模倣から〝創造〟が生まれる

ところで、子どもたちは、模倣によって身につけたいろいろな能力や知識を、いろいろに組み合せて、

新しいものを作り出します。だから、創造というのは、全くの〝無〟の状態から生まれ出るものではなくて、すでに存在するものを土台にして、これに工夫を加え、変化を加えることだ、と言うことができるでしょう。

だから「模倣のないところには、創造もない」と私は思っています。だから、幼児期には、できるだけ、今までの古い文化遺産に親しませ、これを模倣させておくことが、やがて、新しい創造発展をうながす原動力になるのだと思います。

そういう意味で、前回、職業の選択について、親代々の長い経験から得た知識をそのままそっくり次の世代に伝えることのできる〝世襲〟というものを、もう一度考え直してみる価値があるのではないか、と言ったわけです。

くどいようですが、親の無為、放任からは決して創造的な子どもは生まれませんし、育ちはしません。親が真剣に子どもの教育に立ち向かう時は、たとえそれが間違っていたとしても、決して悪く反応することはないと思います。親の真心から出た教えというものは、正しいものは勿論ですが、誤ったものでも、子どもの心に暖かい励ましとして伝わり、益にこそなれ、害になることは決してないと信じています。

その意味では、古い教育も新しい教育もありません。親は自信をもって、わが子の教育に当たることが絶対に必要だ、と思います。

学業成績と通信簿　(1)

〝評価〟を根本的に考え直そう

学習には〝評価〟というものがつきものですが、この〝評価〟については、改めて考え直してみるべき問題がいろいろあると思います。まず、「何のために評価するか」ということから根本的に考え直してみる必要があると思うのです。

もちろん、教育の効果をより一層高めるためには、時々その効果のほどを調査しては反省してみる必要があります。けれども、今の教育界には、〝子どもを育てる〟ことを忘れた〝評価のための評価〟が余りにも横行し過ぎているのではないでしょうか。

昨年、ひとしきり通信簿の評価の仕方が問題にされ、家庭から学校、ひいては文部省までがこの論議に加わって、けんけんごうごうたるものがありました。そこで、まず、この問題から考えてみたいと思います。

通信簿は必要なのか？

私は、元来〝通信簿廃止論者〟で、通信簿はある意味では有害無益、少なくとも不要なものだと考えています。家庭との通信は、こんな形式ばったものではなく、もっと頻繁に連絡し合うべきもので、懇談が最もよく、手紙のやりとりがこれに次ぎます。

ただ、今までのしきたりとして〝通信簿廃止〟がむずかしいと言うのなら、通信簿の存続を認めてもよろしい。ただし、通信簿の評価の仕方は〝二段階評価〟にとどめるべきであることを主張します。

それは〝可〟と〝不可〟との二段階です。評点は〝プラス、マイナス〟でも〝一、二〟でも〝A、B〟でも何でもよろしい。要は二段階であればよろしいのです。

〝不可〟は現在の学力では、今後の学習に支障を来たす恐れがある、と担任が認めた場合にのみこれを与え、他はすべて一様に〝可〟を与える、というものです。ただし、学力としては〝不可〟に相当する場合でも、当人としては相応の努力をしている場合には〝可〟を与えることとします。

従って、〝不可〟をもらう子どもは、学業成績が極度に悪い上に、学習態度が悪い者であって、普通学級には一人もいないか、いてもせいぜい一人か二人くらいのはずです。

成績を家庭に知らせる無意味さ

学習成績を家庭に通知するのに、これ以上くわしく知らせることは無意味だ、と私は考えています。真っ先に述べましたように、そもそも成績を知らせる通信簿などというものは、ないのが一番よいのです。

一体、成績を家庭に知らせることによって教師は家庭に何を期待するというのでしょうか。「あなたの子どもの今学期の成績は大そう良かった。その調子で勉強して、一そう良い成績をあげてくれ」……これればかりだったら悪いこともないでしょう。

しかし、成績の悪い場合はどうなりますか。「今学期悪かった課目は、家庭でよく勉強して、次の学

期の始まるまでに学力を回復させておいて下さい」とでも言うのでしょうか。

事実、成績不振の子どもの通信簿には、たいてい、そのような意味のことが書かれているのが普通です。しかし、学校で、指導に熟練した先生が毎日熱心に指導していても成績の不振な子どもを、専門的知識がなくて指導法もほとんどわきまえていない家庭の両親が、どうして成績の良い子どもにしてやることができましょう。それはまず不可能と言わなければなりますまい。

子どもの成績を良くするための手立てを全く持たない家庭の母親たちに、「あなたの子どもの学力は、このクラスでは下の下です。もっと学力を上げるよう努力して下さい」と言うのは、ただでさえ心を痛めている母親の苦痛をさらに増すだけで、何の効果も期待することはできません。

〝点取り虫〟を養成するだけ

どういう科目のどの点がどのように悪い、と知らされても、母親にできることはただ「勉強しなさい」と叱咤激励することだけであって、真に成績を良くするための手段を講ずることができませんから、まことにあわれと言うべきです。子どもにしたところで、ただ「がんばれ、がんばれ」と鞭打たれるだけでは、そのあわれさは母親のそれに劣りません。

通信簿が家庭にまき起こす悲劇というものは、たいてい右のようなもので、このような通信簿は〝百害あって一利もないもの〟と言っても、決して過言ではないと思います。

とりわけ、小学校の低学年のうちから、細かく学習成績を評価して、それによって学業の向上をうながそうとすることは、いわゆる〝点取り虫〟を養成するだけであって感心できません。むしろ、学習成績などには無関心に、のびのびと好きなように学習させることの方が大切だと思います。

性格形成上にもマイナス

通信簿廃止を私が主張するのは、あのように重々しい形で成績を家庭に通知すれば、どうしても受け取る側も実際以上にこれを重大視するからです。成績が良ければ良いで有頂天になり、親も子も慢心しがちです。反対に、成績が悪いと悲観して自信を喪失しがちです。

慢心すれば、向上心が薄れて努力を怠り、そうなればたちまち成績も下降線をたどり始めます。それ
ばかりではありません。慢心する者は、他人をあなどりますので、他人を不愉快にし、果ては社会から

爪はじきされる憎まれ者になるに決まっています。

また、反対に、自信を失った者は、初めから向上心がなく、従って、成績が向上するわけがなく、いつも人から見下される、情けない人間になるよりほかはありません。

このように、通信簿というような形式ばった形で成績を家庭に通知することは、慢心型の人間を作るか、さもなければ、自信喪失型の人間を作るかで、いずれにしても良いことはないように思われます。

学業成績と通信簿　(2)

不得意と得意

通信簿を書く教師としては、成績が悪いと評価されたことにより、その劣っている点を努力して直そうとする態度を子どもやその家庭に期待するものでしょうが、およそ自己の短所欠点を直すということは、よほど自覚のあるりっぱな成人でも、なかなかできることではありません。

私など、五十歳を越えても、自信のある得意な面では努力を少しも惜しみなく傾けることをしますが、欠点を改めたり苦手を克服するという面では、心の中で「ほんとは努力した方がよいのだが…」と思っても、なかなか実行には移せないでいます。

分別のあるおとなでさえ、得意なものは、「やらないでも結構」といわれても、なおやりたく思いますが、不得意なものはやろうともしないのが人情ですから、まだ分別のつかない子どもが、不得意なものを、「不得意だからこれを克服しなければならないにと覚悟して努力するはずがありません。

得意なものを生かして

およそ、不得意なものは、やるのが苦痛だからできるだけこれを避けようとし、得意なものは、やるのが楽しいから一層努力してやるというのが人間に与えられた本性のように思われます。

人間は、これらの天性を与えられているからこそ、それぞれに個性のある人間に成長するのであって、また、それ故に、個人個人がおたがいに異なった長所を身につけて、複雑であるこの世の中のいろいろな仕事を、それぞれ自分に適した分野で受け持って活躍することができるのです。

人間の世の中に驚くほどの進歩発展があるのは、他にも理由はありましょうが、その大きな一つは、

人間にこの天性が与えられているからだ、と私は思っています。

ばらの花はほんとうに美しい。けれども、世の中にばらの花しかないということになったら、この世はさびしいものでしょうね。やはり、桜の花やすみれの花や、タンポポの花や菜の花や、その他いろいろな花がほしいですね。ぱっと咲いてぱっと散っていく花、色あせてもなお散ろうとしない花、濃艶な花、淡白な花、豪華な花、可憐な花、いろいろなタイプの花があってこそ、世の中は美しく楽しいものになるのです。

何でもできる必要はない

世の中には、いろいろな仕事があります。だから、世の中の人が、皆、総理大臣となる能力を持つことは、決して望ましいことではありません。大将ばかりの軍隊では戦争ができません。えらい大将よりも、えらくない兵隊の方がたくさん必要であるように、この世の中では、えらい総理大臣よりも、普通の人の方がたくさん必要なのです。

だから、正しく言えば、だれもが大臣を目指すような教育は、決して正常な教育ではない、と私は思っています。同様に、国語も算数も理科も社会科も、何でもよくできることを求める教育は、決して正常な教育だとは思わないのです。また、同じ一つの教科、たとえば国語科にしても〝聞く、話す、読む、書く〟といういくつかの分野があります。そのどれもが皆よくできる、ということも決して望ましいことだとは思いません。

〝話す〟ことはじょうずではないが、〝読む〟能力はすばらしいとか、〝読む〟能力はそれほどでもないが、〝書く〟ことにかけては先生さえ及ばないほどすぐれているとか、〝書く〟ことは、からきしへただが、〝話す〟ことにかけてはクラス第一番であるとか、そういう欠点もあれば長所もあるということの方が、現実の世の中では役に立つと思うのです。

好きな教科を伸ばそう

前にも述べましたが、不得意なものをやるのは苦痛で上達が遅いけれども、得意なものはやるのが楽しくて進歩が速いのですから、不得意なものに力を入れるよりも、得意なものに力を入れた方が能率的であって、その方が、その人のためにも社会のためにも、より有益だと思います。

だから、私は、学校教育で、すべての教科にひとしく努力することを求め、学力においてもすべての教科にすぐれていることを理想に目指していることを、いけないことだと思っています。

「現実には、すべての教科にひとしい努力を払っても、実際にはできるできないの差が出て来て、結局、いろいろなタイプの人間ができ上がる。せめて、理想として、すべての教科にひとしく努力させることが必要ではなかろうか」という考え方もあります。しかし、それならなおのこと、そんな無駄な努力をするように求めてはいけません。

「理想としてはすべての教科に高い学力を求めて、現実にはそうならないことを認める」というのでは、〝現実の社会に役立つ、個性のある人間はすべてでき損ないである〟ということになってしまうではありませんか。

何でも適当にできる人間がよくて、特殊能力を持った人間ができ損ないである、というのでは、同じ仕事をやるのにも張り合いがないでしょう。現実の社会が、いろいろの能力を求めている以上、ある種の能力さえ身につけたなら、他の能力はなくても、現実の人間としては、りっぱな人間、望ましい人間と見るべきだ、と私は思います。

学業成績と通信簿 (3)

教育の行き過ぎ

そういうわけで、私は、今の学校教育が、どの学科もよくできる児童・生徒、あらゆる点で過不足のない円満な人間を育てることを理想とし、これに向かって努力しているのを、教育の行き過ぎだと思っています。

とりわけ、このような理想に照らして子どもの短所と思われるものを残らず探り出し、これを改めるように要求する今の通信簿は、何としても有害無益の存在で、一日も早く廃止すべきだと思います。

もちろん、何でもよくできる人間もあった方がよろしい。しかし、それは、他のことはできないがこのことだけはよくできる、という人間以上に尊敬されなければならないように考えられている今の教育界の風潮は、明らかに誤っていると思います。何でもよくできる人も、何か一つだけがよくできる人も、同じように尊敬されなければなりません。

およそ、人間というものは、幼児期の子どもを見ればよくわかるように、常に周囲のものに興味をも

ち、これを理解しようと努めるものです。つまり、勉強したいという気持は、食べたいという欲望と同じように、だれもが持っている本能の一つだと私は思っています。

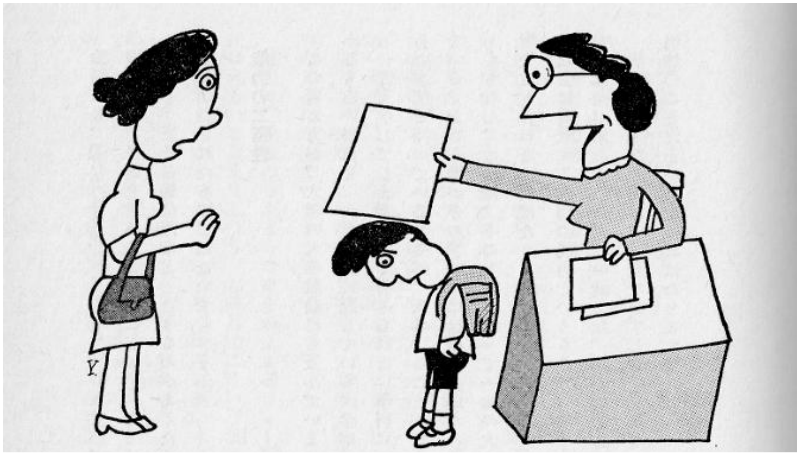
興味と教育との関係

幼児をごらんなさい。興味のある対象に取り組んだら、何もかも忘れてしまって、ただ一心にそれを追求しているではありませんか。

だれでも、何事かに興味を抱いて、それに取り組まずにはいられないように生まれついているのです。そして、一度何事かに取り組んだら、だれでも、その面の能力をすばらしいものに育て上げずにはおかないのです。

ただ問題なのは、まれに、何事にも興味を示さない子どもがいることです。これは、言わばエンジンのない自動車のようなものですから、これでは人間としての成長発展が遂げられません。

しかし、これとても、特別にそういう性格に生まれついたものでは決してありません。そういう無気力さは、生まれつきではなくて、育てる側に多く責任があるのです。



こういう子どもに対して、ただ「もっと積極性がほしい」「意欲的であれ」と言ったところで何になりますか。それは、病人に対して病状をありのままに知らせ、落胆させておいて、「あなたは、この病気を直す義務があります。一日も早く直すように努力しなさい」と説教するようなものです。全くばかげたことだとお思いになりませんか。

通信簿の記録性と通知性

通信簿は、言わば、病人のカルテです。そのような性質の通信簿を、子どもの家庭に送るのは、それだけでも問題があります。

医師、つまり教師が、記録しておいて指導の参考にすべきものを、患者である子どもの家庭にそのまま知らせて、それで良

い結果を期待しても、それは無理というものです。

家庭に送る通信簿は、患者である児童、生徒の気持を明るく引き立たせ、生き生きとさせるものでなくてはなりません。「家庭の協力を求める」と言えば聞こえはよろしいが、事実は決してそのようなものではありません、

教師が、当然負わなければならない教育の仕事を、家庭に転嫁するものであって、このような通信簿は、即刻廃止しなければならないものだと思います。

前回述べましたように、社会が、万能の人間よりも、一芸に秀でた人間を求めているのですから、学校教育でも、一芸に秀でていれば、何もそれに文句をつけるすじあいはないはずです。

論語にも、「君子は多能ならず」といわれていて、人間は多能である必要は全くないのですから、学校教育で、多能を求めるようなことはすべきではないと思います。

これも、なまじ通信簿などというものがあるために、正に「毛を吹いて傷を求める」ような愚かなことが助長されたものではないでしょうか。

能力の二面性

この考え方が、大学の入学試験にも及んでいます。大学に入ってから専攻する学科には全く縁もゆかりもない科目を、入学試験に課している大学が、何と多いことでしょう。

一度入学してしまえば全く省みられない学科に不得意であるばかりに、専門とする学科にはすばらしい才能を持っている学生が、入学することができないで、あたらその才能を伸ばすことができないでいる、という例が今の世の中には随分多いだろうと思います。

もちろん、これは、その学生にとって一生の大きな損失ですが、わが国の社会にとっても、大変な損失だといわなければなりません。

社会に貢献する人間の能力というものは、何でも平均してできるという能力ではないでしょう。現実の社会が求めている人間の能力は、特殊な能力です。

学校で優秀な人間が、社会で必ずしも成功しないといわれますが、今の学校教育を見れば、それは当然のことだといわなければなりますまい。

真の教育は家庭にある

もっとも大切な幼児教育

高校教育から中学教育へ、中学教育から小学校教育へと移って行った私は、今、大学教育にたずさわりながら、幼稚園教育にも力を注いでいます。

こうして幼稚園教育から大学教育まで、自分で一通りやってみますと、〝教え育てる〟という言葉が実際に当てはまって、教師の影響力の大きいのは、幼稚園から小学校の間までで、あとは、だんだん〝教育〟という言葉からは離れたものになっていくようです。

従って、教育として最もやり甲斐のあるのは幼稚園教育であり、それから上にいくに従って、教育の楽しみは薄れていくようです。

幼児は、教師の与えるものをそのままそっくり受け入れて育っていきますから、それだけ教師の責任は大きいと言えましょう。しかし、こういう責任のある仕事に従事する幼稚園の教師が、教育の世界では最も低いものに見られ、最も待遇が悪いのは、どうしたということでしょう。

教師の資質を向上させることを図ると共にその責任の大きいのにふさわしいだけの待遇を、国として考えるべきだと思います。つい先ごろのニュースで、国立の幼稚園教員養成課程の出身者が、ほとんど、待遇の良い小学校に流れて行って、幼稚園に勤めた者の極めて少ないことを報じていました。

このようなことでは、国費で幼稚園の教師を養成する意味がないではありませんか。一般に、幼稚園の教師は小学校へ、小学校の教師は中学校へと、上級学校へ勤めたがる風潮がありますが、これは、教育のためには決して好ましいものではありません。

子どもの能力はあまり変化しない

私は、小学校で、一年生から六年生まで、一貫して担任をした経験があります。一年生の時に子どもたちに下した判定は、六年生になってもほとんど違いはありませんでした。

今の大脳生理学が述べていますように、小学校に入学するころの子どもの能力は、その後の長い一生の間にも、ほとんど変化する余地のないまでに育っているのです。

私の経験でも、一年生の時に十の能力を示していた子どもは、六年生になっても十、八の子どもは八、

五の子どもはやはり五、というのがほとんどです。

また、一年生当時、学業成績は今はそれほどでもないが、伸びそうだなと思った子どもはやはり伸び、反対に、今は学業成績は良いけれども、どうも伸びないのではないかと思った子どもは伸びません。

結局、一年生の時に教師が観察して得た子どもに対する判定は、六年間ではまず変わることがありません。恐らく一生を通じても変わることはあるまい、と私は思っています。

十の能力の子どもは六年たっても十、五の能力の子どもは六年たっても五、というのでは、何としても教育に当たる力として張り合いが少ない。教育者としては、もっと、良くも悪くもなる可能性の多い時期に、子どもを教育してみたい、とだれしも思うでしょう。また、そういう時期の教育こそ、ほんとの教育だと思うでしょう。とすれば、小学校以後には、ほんとの教育はない、ということになります。では、幼稚園がほんとの教育かと言いますと、どうも幼稚園に入園するまでの間にすでに決まってしまっている、というように私には思われるのです。

幼稚園に預けられている間に、どれだけの変化があるでしょう。勿論、肉体的にも精神的にも大きな変化はありますが、それは成長が著しいということであって、教育による変化とは違います。幼稚園の教育の影響力は、小学校と比べて、五十歩百歩の差に過ぎないと思うのです。

真の教育は家庭にある

とすれば、「真の教育は家庭にある」ということになってきます。事実、私は、幼稚園教育から大学教育までを通してやって来た経験から、「教育は家庭のものだ」とつくづく思わされることばかりです。

チンパンジーやオランウータンは、生まれて数か月の間は、人間の子どもよりも賢く立ち回ります。しかし、彼らの生活は、百万年前のそれに比べて、一歩も進歩していません。人間だけが、自分の一生の間に得た知恵を子どもに教えることにより、偉大な進歩を遂げ現代の輝かしい文化を築き上げました。これこそ、教育の力であり、その教育は、「親が子を教える」という形で行なわれて来たものです。

職業を世襲する価値

私が、職業を世襲することの価値を再認識する必要があると説いたことには、こういう背景があるわけです。と同時に、教育の責任者としての〝親の覚悟〟を覚悟する必要のあることを皆さんに訴えたい

のです。

昔から、「瓜の蔓には茄子はならぬ」と言われています。親が子どもにどんなに期待したところで、親の与えるものしか吸収できない子どもには、親自身が向上する姿勢を子どもに示さない限り、期待はずれに終わるのは当然と言わなければなりません。

（「教育新聞」昭和四十五年一月三十一日号～同年五月三十日号）

生涯教育としての国語教育

最初にこの会（国語問題協議会）でお話をいたしましたのが「小学校における漢字教育」という題で、たしか昭和三十二年だったと思います。もう二十年以上の月日が流れております。本日は「生涯教育としての国語教育」ということでお話申し上げたいと思います。

言葉を知らなければ意識にならない

一九三〇年代以降、「チンパンジーに言葉を教える」という実験が多くの学者によってなされております。有名なものにケロッグ夫妻、ヘイズ夫妻などの実験報告があります。これらは、人間の赤ちゃんと一緒にチンパンジーを育てて、我が子と全く同じ扱いをして、言葉をその間に教えて行こうというものです。これらの報告によれば、皆一様に生後一年半ぐらいまではチンパンジーの方が賢いそうであります。ところが、一歳半頃になりますと、人間の子どもは言葉をどんどんと覚えて使うようになります。そうなると、たちまちに人間の赤ちゃんの方が賢くなるということです。そしてチンパンジーの方

は、人間の赤ちゃんと同じように言葉を教えても一向に言葉を覚えて使えるようにならない。こういうことを報告しています。

この実験でわかりますことは、言葉を覚えて使うことが出来るのは人間だけである。人間に次いで知能が高いと言われるチンパンジーでさえ言葉を覚えることが出来ない、ということです。これは裏返しますと、人間は言葉を覚えることによって真の意味での人間になる。真の意味の人間になるということは言葉の習得によって初めて可能なものである、ということがわかるわけであります。

この言葉の重要性を証明するものに、蝶の観察に関する実験があります。蝶の標本の中から一匹の蝶、例えば黄色い羽に黒い縞のある蝶を取り出して子どもに観察させて、数時間後これを元の箱に戻し、先ほど見た蝶がこの中のどれであるかを当てさせます。この実験で正しく言い当てられる子どもは、必ず、〝黄色〟という言葉を知っており、〝縞〟という言葉を知っている子どもに限られる、こういう実験です。つまり言葉を知らない子どもには見た蝶の特徴を記憶して、これを正確に言い当てることが出来ない、というわけであります。このことは、明らかに、私どもは言葉で物を見ている、ということを証明しています。黄色い色を見てこれを黄色だと意識するためには、黄色という言葉が必要であって、黄色という言葉を知らなければ、色が目に入ってもそれがはっきりとした意識にはならないのです。だから、記憶にはならないわけで、そのために正しく言い当てることが出来ないのです。

このように、人間は、言葉を覚え、その言葉によって経験を真に経験たらしめ、その経験を知識として成長して行くわけであります。

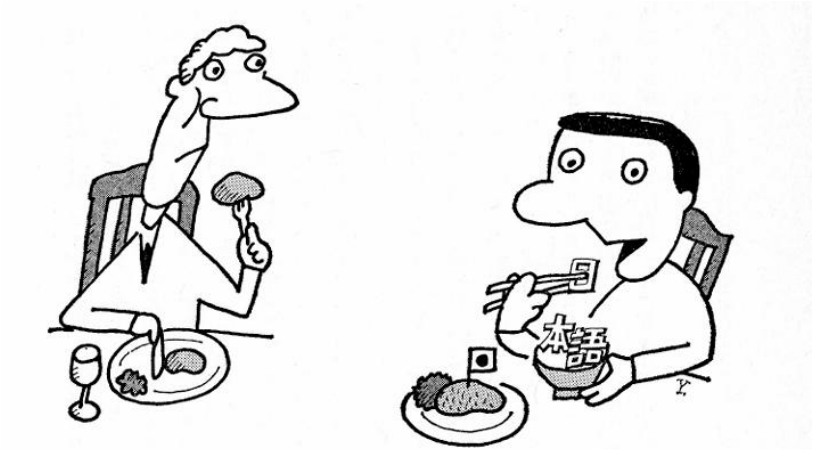
日本語が日本人を創る

さて、「言葉が人間を創る」ということが言える以上に、「日本語が日本人を創るのだ」と、こういうことが言えると思います。事実、私どもは、たとえば牛を見かけますと、「あ、あそこに牛がいる」と思い、またそう言います。つまり、日本語の〝牛〟という言葉で牛を見るわけです。ところが、〝牛〟という言葉は、英語では cow とか bull とか ox とかというような言葉がこれに当たるわけですけれども、cow というのは牝の牛のことであり、bull というのは牡の牛でありますし、ox はその去勢されたものであります。しかも ox というのは、一頭である場合は an ox と言いますが、二頭以上になりますと oxen となります。それで、「あ、あそこに牛がいるよ」と言う場合、私どもは牝牡に関係なく、

また数にも関係なく、「あ、牛がいるよ」と自分でもそう思い、人にもそう言いますが、言葉の違う欧米人は、その見方や考え方が当然違って来るわけです。つまり、性や数に関係のない牛というものを考えることは、そういう言葉を持たない欧米人には出来ないわけであります。

このようなわけで、「まさに日本人というものは日本語によって創られたものである」ということが出来ると思うわけであります。最近、東京医科歯科大学の角田先生が『日本人の脳』という本を書かれまして、日本人の脳の構造には欧米人と違う部分があるということをおっしゃっています。しかもそれは、日本語というものによってそうなって行くものらしい、ということをおっしゃっていますが、その意味からするならば、疑いもなくこれは科学的に言って、「日本語が日本人を創っている」と、こう断定出来るのではないでしょうか。

私は、日本人が本当に優秀であるとするならば、それは日本語の優秀性に因るものである。つまり、日本人が頭が良いとすれば、それは日本語がすばらしいためなのだ、そう言ってよろしいかと思います。



日本語のすぐれた特徴

日本語を調べてみますと、外国語には全くないいろいろな特徴がございます。

その第一は「てにをは」です。これは言葉と言葉との関係を明確に示すものであって、これによって文意が非常に正確に表現出来る。例えば英語で言えば I とか my とか me とかというようにいわゆる語形変化によって区別するところを、「私は」、「私の」、「私に」あるいは「私を」というように、「てにをは」によってこれを明確に示すことが出来る。そしてこれは内容を持たない全く抽象的な言葉であります。このような形式だけを表わす言葉は、よその国の言葉にはほとんど見ることが出来ません。強いて言えば英語の前置詞がこれに当たるでしょうが、これは我が国の「てにをは」とはかなり異なっております。「て

にをは」は全く思想を持たない、全く内容を持たない、純然たる形式を示す言葉です。こういう言葉を発明した日本人の能力というものは、私は大変にすばらしいものではないかと考えております。

それからもう一つ大きな特徴は、漢語と和語、……わが国の古い言葉、つまり大和言葉と、本来は中国語である漢語とが、混然一体となって使われていることであります。これは、同じ中国語の影響を受けている韓国とは全く事情を異にしている点であります。たとえば、「教室」とか「教育」という言葉、この「教」という字を、教えるという言葉―和語―を表わす文字としてもこれを使っている、また「学問」、「学校」の「学」という字を「学ぶ」という言葉を表わす文字として使っていることです。これは非常にすばらしいことでありまして、実は私はこれについて一つの論文を書いております。大学において、これを数年前まで講義しておりましたが、これは一年かけてやっておりました。従って、その内容をここではとても紹介する余裕がございません。ただ、教育の「教」という字を「教える」というようにも用いることは、非常にすばらしいことである、ということを指摘するだけに止めたいと思います。

ローマ字・仮名・漢字の読み取りくらべ

さてここで、日本道路公団が今から二十年ほど前に実験したことについて、述べたいと思います。日本で初めての自動車道、名神高速道路は、名古屋と神戸との間に建設されたのですが、それに先立って、ローマ字と仮名と漢字による表記の読み取り速度を調べる実験をしています。同じ内容のものを三様の表示板に作りまして、それぞれを何秒で読み取れるか、ということを調査したわけです。これは写真のシャッターを押すような仕掛に作られていて、露出時間を変えることによって読み取りの速度を計るわけです。この調査によりますと仮名はローマ字のおよそ半分の時間で読み取ることが出来ます。つまり、ローマ字は、仮名の二倍もの時間がかかる。ところが、漢字で書かれたものは、仮名の十分の一の時間で読み取れるのです。これは平均値が出ていましたが、仮名の場合は、〇・七秒、ローマ字ですと一・五秒、それが漢字ですと〇・〇六秒で読み取れる。こういうことでした。これはその後、前・東京大学工学部教授、渡辺茂先生の実験により、漢字はもっと短時間で読めることがわかりました。渡辺先生は『漢字と図形』という本を書かれていらっしゃいますが、その中で、漢字は〇・〇六秒どころか、もっともっと僅かの時間で読み取れる、ということを書いていらっしゃいます。渡辺先生の場合は、暗室に

漢字のカードを置きまして、そこで電燈を点滅することによってそれを読み取る時間を測定するのです。これだと、〇・〇〇何秒というように極少時間点燈させることが可能なのだそうでありまして、そうしますと、もうどんなに僅かな時間の点燈でも漢字が読み取れる、ということであります。ともかく漢字は、現在世界で使われているどんな文字よりも、内容を正確に、速く読み取ることが出来る文字であるということは、この実験によって明瞭である、ということが出来ると思います。

漢字と仮名の組合せ――優れた表記

そういう漢字を主要な文字として、またそれと全く異なった性格の「てにをは」という論理的、形式用語を仮名で表記し、漢字と仮名とを見事に組合わせて表記する日本語の仕組み、これは日本人の能力を非常に高める働きをしていると私は思います。レジュメに書いてありますけれども、たとえば「コースイ」という言葉には普通三つの言葉がございます。まず、香りのよい水の「香水」、次に英語でいうハードウオーターの「硬水」、それからミネラルウオーターの「鉱水」です。「コースイ」という言葉ではなかなかぴんと来ないものが、文字になって出て来ますともう即座に、その内容まで頭に思い浮かべることが出来るわけです。

漢語の場合、これを漢字で書くということは誰も容易に考えることでありますが、大和言葉の場合、たとえば「はな」という言葉。「はな」という言葉は「端」という漢字が日本語のはなという言葉をよく表わしていると思います。つまり、物の突き出たところ、飛び出たところ、こういうところを大和言葉では「はな」と言っているわけであります。ですから、それを漢字で書き表わしますと「端」という字がそれに当たる。顔の中で「端（はな）」の部分、つまり一番飛び出たところが「鼻」であります。それから桜の花とかチューリップの花とかと言いますけれども、「花」というものはすべて先端に咲き出るものでありまして、つまり「端（はな）」に咲いているものだから「はな」と呼んだのでしょう。あるいは初めは「端（はな）に咲いているもの」という風に呼んだものの省略かもしれません。また、鼻から出る液体を「はな」と呼んでいますけれども、これを表わすものに「洟」という漢字がございます。

このように大和言葉でも漢字で表記することによって私どもの思想が一層明確に、速く正しく伝えやすくなるわけであります。このことは、中国の言葉を表わした文字である漢字を、日本語を表わす文字に変えてしまった、ということです。これが日本語の特徴であり、優秀性であると私は思うのです。従

って、こういうすばらしい日本語を使っている日本人は、当然頭の働きがよくならなければならない、私はこう考えるわけであります。

さて、以上のことを考えた上で、これから国語学習の時期とその方法についてお話し申し上げたいと思います。

言語学習は幼児期にこそ

一般に言語学習の成熟期は幼児期にある、と言われています。人間が肉体的に成熟するのは大体二十歳頃ですが、言語の成熟期は非常に早い時期にありまして、学者は三歳から四歳までの間、これを成熟期と呼んでいます。私は、漢字もこの時期に言葉と一緒に学習させるのが最もよい、ということを実験によって確かめております。従来、漢字は難しいものと考えられて来ました。しかし、これは決して難しいものではありません。学ぶ時期が余りにも遅過ぎるから難しくなるわけです。言語の成熟期は三歳から四歳の間にあるわけですから、視覚言語である漢字もその時期なら覚えやすいのです。実は成熟期もしくはそれ以前の幼児には、「漢字は言葉よりも覚えやすい」ことがわかりました。それは次の実験によって確かめております。

まず第一番目は、言葉が覚えられないほどひどい脳障害児について、何名か実験しております。どんなにひどい脳障害児でも漢字は覚えることが出来ます。このことについては『親こそ最良の教師』（第四巻「親こそ最良の教師」のⅠ所収）という本で報告しておりまして、これは昭和五十五年の十月に発売になりました。言葉の覚えられないようなひどい脳障害児でも漢字は覚えられる。これは漢字カードと実物とを対応させる方法ですが、この操作をくり返していますと、その間に言葉も覚えられるようになるという事実がありました。これが一つ――。

次は、まだ言葉が言えない赤ちゃんに漢字カードを見せてこれを読んで聞かせていると、漢字をどんどんと覚えて、これを読むようになるということです。先ほど言いましたように、一歳半の赤ちゃんはチンパンジーよりも知能が低いくらいです。それはまだ言葉が覚えられないからであって、大体一歳半の赤ちゃんは、三十くらいの片言がやっと言えるに過ぎません。これは私も自分の孫で確かめておりますが、言葉はそのくらいしか覚えることが出来ない。ところが、漢字ですと、二字から三百字の漢字を覚えさせることが可能であります。実験はまだ二名だけですが、田中庸介と又吉孝旨という二人

の子どもがいずれも一歳半の時点で、二百の漢字を覚えてこれを読んでいます。その理由は、視覚言語の方が聴覚言語よりも覚えやすいということであります。言葉は発するや否や消えて無くなってしまうが、漢字は覚えるまで待っていてくれます。それともう一つ。言葉の内容は視覚的なものであり、従って視覚言語である漢字がこれと結びつきやすいのかも知れません。事実私がそういう子どもを使って実際に指導してみますと、明らかに漢字は簡単に覚えられます。

現在の漢字の教え方の誤りとは

今、小学校の六年生は、一年間に百九十字の漢字を学ぶに過ぎません。小学校では、一年間に二百字の漢字の学習さえ難しいと考えているわけです。私も実験していますが、五、六年生になると、一年間に二百字の漢字を習得することが非常に困難になります。頭の良い子は容易に習得しますけれども、中以下の子どもには、二百字の漢字を一年間に習得するということは実に難しい。ところが、二、三歳の幼児だったら年間三百や四百の漢字は容易に覚えます。精薄の子どもでも苦労しないで覚えます。たとえば、『親こそ最良の教師』で報告しております愛子ちゃんという子ども、この子はひどい脳障害で一年かかっても仮名が一文字も覚えられなかったのですが、この子が年間二百字の漢字を覚えているのです。仮名は一文字も覚えられない。しかし、漢字だと二百の漢字が一年間に覚えられるのです。それはもうひどい重度の脳障害児なのですが、それでも漢字は習得出来る。漢字教育というものが、今のような形態で行なわれる限り、非常に難しい。年間二百字が覚えられないのですから。

しかし、これが幼児期ですと容易になります。私は一年生に六百字も教えた経験があります。それでもほとんどの子どもが苦しまずに覚えてくれました。漢字を覚える能力は、幼ければ幼いほど高いのです。故・時実利彦先生が「一生のうちで最も吸収力の強い時期は零歳から三歳までの三年間であろう」こういうことを言っていらっしゃる。生後の三年間が一番吸収力は強いのではないか、というのが大脳生理学から見た見解でありますが、私の幼児に対する実際指導の結果でも、全くそのようになっております。

今、二歳からの幼児に対していろんな実験を試みておりますが、二歳、三歳という子どもはちっとも努力しないで、提出された漢字カードを、いつともなく、すらすらと覚えてそれを読むようになります。確かに 幼児期というのはすばらしい能力を持った時期です。ところが、この時期には漢字教育など全

く無理だという考えで幼児期を全く無為に過ごしてしまっています。そして学校に入ってから、それも私に言わせれば一番よく覚える一年生には漢字を教えるより先に仮名を教えているのです。

虫や魚は難しい漢字

また、幼児にとって最も覚えやすい漢字は「鳩」とか「鶴」というような字で、これは「鳥」という字よりも覚えやすいのです。二、三歳の子どもでしたら、どんなに物覚えの悪い子どもでも「鶴」とか「鳩」という漢字は覚えられる。そういう字を覚えた後でないと「鳥」は教えていけない、というのが私の主張なのです。これは私の幼児に対する実際指導から出た結論です。「虫」とか「鳥」とか「魚」という字よりも「蟻」とか「蜂」、「鳩」とか「鶴」、また「鱒」とか「鮒」とかという漢字を幼児はいとも無造作に覚えます。「虫」という虫は存在しません。存在するのは蟻であり蜂であるわけです。鳩や蟻や鱒を理解してからでなければ、「鳥」や「虫」や「魚」というような上位概念は理解できません。だから、そういう漢字もまた教えるべきではない。これが私の考え方です。それから一とか二とか三という漢字はもっと難しいのです。蟻や鳩は二歳児なら容易に読めるようになりますが、一や二や三はなかなか読めるようになりません。これは幼児に実験してみれば容易に判ることです。「一」「二」「三」のように抽象度の高いものは幼児には理解しにくい。理解しにくいものは覚えられないのです。だから、仮名はもっと抽象度が高いわけですから、幼児にはもっと難しいわけです。「具象的なものから、だんだん抽象的なものに移って行く」というのが学習の手順であるのに、今の教育は全く逆の学習のさせ方をしているわけです。これでは子どもが困るのが当り前であります。覚えやすい時期に漢字を教えないでいて、漢字学習能力が低下してから一所懸命になって漢字を教えている。教える先生も苦労するなら、学ぶ生徒も苦労するわけです。こういう愚かなことを、私は一日も早く止めさせたいと思って、もう二十年も前からこのことを主張しているわけですけれども、なかなか受け入れてもらえません。非常に残念に思います。

このようなわけで、私は言語学習においては幼児期が成熟期でありますから、当然この時期に漢字をどんどんと教えるようにしなかったなら子どもの能力は育たない、と思うわけであります。

機械的記銘と論理的記銘

一体、記憶の仕方には、機械的な記銘と論理的な記銘とがございます。機械的記銘法というのはいわゆる丸暗記でして、これは生後の三年間が最も強い。これは時実先生の御見解であり、また私の実験でもそのように認められます。この時期は大変無造作に覚えます。覚えようとは思わないのに覚えられてしまうのです。生後の三年間、それに引き続く二年間、つまり小学校に入るまでの幼児は、漢字を実に無造作に覚える。しかも、これは、強く記憶にとどまってなかなか忘れ難いもののように思われます。ところが、これは年をとるに従って、つまり一年生、二年生と学年が進むにつれて、機械的記銘の仕方というものはどんどん低下して行きます。文字が覚えにくくなると同時に、忘れやすくなります。だから、昔から、学校の漢字教育はうまく行かないわけです。

機械的記銘法に対する論理的な記銘法というのは、一般的に言いますと、小学校の二、三年生から芽生え、年と共にどんどん発達して行きます。しかし、二、三歳から漢字を学習させますと、五、六歳で論理的記銘法の芽生えが明らかに見られます。従ってこの記銘法は、早く漢字学習を始めれば始めるほど、早くから発生するものと思われます。これは、丸暗記した漢字が、頭の中で自然と分類され整理されるような働きが、人間の脳にはあって、そのためではないかと思われます。例えば「鳩」という字を学び、次に「鶴」という字を学びますと、幼児は「あ、この二つの漢字には同じ部分がある」と気づき、それを指摘します。そこで、「鳥」という概念について教えてやりますと直ちに「鳥」という概念を理解して、今度は「鳥」のついた字、例えば「鶏」を見ると、「これは鳥の名前に違いない」と推定するようになる。このように、まだ学習しない漢字でも推理する、という能力がついて参ります。従って、論理的記銘法は、もっと早く芽生え、発達するものではないかと思われます。一般的には、小学校二、三年にならなければ無理だと言われていますが、早くから漢字に接していれば、小学校に入らないうちから芽生え、発達することは確かだと思います。そしてこの論理的記銘法によりますと、漢字は大層覚えやすく、しかも忘れにくいものになります。

ところが、学校教育では、漢字を全く丸暗記、つまり、機械的記銘に訴えて学習させています。論理的記銘法を全く無視しています。漢字学習に最も適した方法によらないわけです。これが学習効果の上がらないもう一つの理由です。漢字は、文字の中で唯一の優れた体系を持った文字です。漢字の九十％以上が形声字と呼ばれるものですけれども、この形声字というものは、実に論理的に見事に構成された

文字であります。従って、そういう論理的記銘に最も適した漢字を、機械的記銘で学習させているということは、全く方法を誤っている、と言わなければなりません。

幼児にとって漢字は覚えやすい

さて、時間が終りに近づいておりますので、急いで結論に持って行きたいと思いますが、「幼児にとって漢字は最も覚えやすい文字である」ということ、幼児にとっては、漢字ほど覚えやすい文字は世界のどこにもありません。まずこのことを認識してほしいと思います。これは現にアメリカでも有名なドーマン博士が認めていて、その研究所では、アメリカの三歳の子ども達が私の主張する方法で漢字を学習しています。アメリカの子ども達かどんどんと漢字を覚えて、これを読んでいるのです。そのくらい漢字は覚えやすい字なのです。こうして漢字を覚え、漢字を読むことによって子どもたちの知能を向上させること、これがドーマン博士のねらいだと思います。

さて、幼児期の幼児にどのくらい漢字が覚えられるかと言いますと、およそ一千字だったら容易であろうと考えております。現在私の主張する漢字教育を実践している幼稚園が全国に四百園近くございます。私の言う通りにやってくれている幼稚園でしたら、在園している間に大体一千字は覚えるようです。一千字の漢字を覚えますと、これは恐らく現在の高校生の漢字力の平均に近いだろうと思います。私は正確な調査をしたことかありませんから断言できませんが、今の高校生の漢字は恐らく一千字までに行っていない、八百字くらいではないかと思っているのです。私はこの間ある幼稚園に行きましたが、一千字以上の漢字をもうすでに読めるようになった子どもがいまして、中学生のお兄さん、お姉さんがあって、それが読めない漢字があると、幼稚園のその子に教わる、という事実を聞きました。これは不思議のようで、実はもう当り前のことなのでして、学ぶべき時期に学ばなければこういうことになるわけです。ですから、幼児期の間にこういう教育を行なって読書力を高めておく。そうすれば子ども達はテレビなどは余り見たがらない、漫画などはほとんど見向きもしない、堂々たる本を楽しんで読むようになるわけであります。

ほんとうの生涯教育とは

昭和五十五年東北大学で行なわれた漢字教育研究会で発表しました ことですが、大阪のある幼稚園で論語の教育をやっています。これは送り仮名一つない全くの白文です。これを子どもたちが喜んで読んでいる。これは三歳の子どもから四歳、五歳まで、いずれも同じテキストでやっていますが、三歳の子どもが一番喜んでやっているというのです。得意になって読むのです。その様子を八ミリ映画に撮りまして、東北大学で発表したわけですが、子ども達が皆目を輝かして読むのです。こういう教育は三歳から始めなくては遅いと思います。そして、これは一生にわたって続けなければいけないものであると思います。今、幼稚園でやっている論語教育は、昔流の素読ではありません。講読です。内容を子どもなりに解らせる努力を致しております。三歳の幼児に論語なんか解るはずがないと言う人がいます。それは私どもと同じ高さの理解を求めるからです。三歳児は三歳児なりに理解出来ます。御承知のように論語というものは、その年齢に応じて、つまり、経験に応じて理解する書物であって、年齢により味わいが異なってそれでよいのです。谷川徹三先生は旧制一高で安井小太郎先生に論語を習って、初めて「論語ってすばらしいな」と、思われたそうであります。自分独りで読んだ時にはわからなかったことが理解出来て、それで論語はすばらしいと思ったのだそうでありますが、その後大学の教師になり、教える立場になって論語を読んでみたら、あの時わかったと思っていたのは本物ではなかったなと思った。そして今また、論語を読んでみると、あの時わかった積りでいたのもまだまだやっぱり足りなかった。こういう意味のことを語っていらっしゃいます。このように論語という書物は、人間の成長と共に理解の程度や味わい方が変って行くものであります。だから私は、三歳児には三歳児なりの論語の読み方がある、と思うのです。

幼児期に、一生涯読み続けるに足る価値のある書物を与えてやり、その読み方の基本を築いてやって、それを一生涯続けることの出来るようにしてやること、これがほんとうの国語教育、生涯教育としての国語教育というものの姿だろうと思うのであります。

二千年も以上も昔の外国の古典が、そのままの形で幼児に読めて理解出来るのです。そこに漢字のすばらしさがあります。漢字は、数千年にわたって、中国人や日本人の精神を表現して来たものです。終生の学習に耐えられるばかりか、味わえば味わうほどに味の出る文字です。その基本はぜひ幼児期に養っておき、「完璧、推敲、矛盾、蛇足……」など、背景の深い熟語は、その後徐々に学んで行けばよ

いと思います。

最後が舌足らずになりましたが、時間になりましたので、これで私の話を終らせていただきます。

（「国語国文」昭和五十六年五月号）

教育の起点は家庭にあり

失われた「厳父」と「慈母」

父という字は、古い字形はで、手に杖を持った形を表わしたものです。杖は、人を指図したり教導する者が手にするもので、いわば「権威の象徴」です。従って、父とは、「一家を率い、家族を教え導く家長」を表わした字です。

父はまた、〝政〟や〝教〟の〝攵〟とも同じ構造です。「国民を正義に教え導く」ことが〝政〟であり、「わが子を教え導く」ことが〝教〟で、その「教え導く」という意味は〝攵〟の部分にあるのです。

今、教育と言えば、すぐに学校とか教師とかを思い浮かべますが、教育とは、本来、親の子に対する本能的な行為であって、そのことを漢字の成り立ちがよく表わしています。

この人生において、長い経験を通して、どうすればよいか、どうすればいけないか、いろいろと理解していきます。そういう経験から得た知恵を一つ一つわが子に伝え、少しでも失敗の少ない人生が送れるようにとする〝親としての本能的な行為〟が教育なのです。

親の知恵をわが子に授けることから、人間の知恵を専門に扱う学者にこれを委任することが効率の良い教育と考えられるようになって、今の学校教育の形に発展してきましたが、やはり真の教育は親のものだと私は思います。その理由はあとで述べます。

さて、論語に「父、父たり。子、子たり」とあります。それは、「父なる者が、父としてよく一家を統率し、家族を教導する権威と責任を全うして、初めて、その子も立派な子になる」ということを表わしたものだと思います。

これにくらべて、今の〝父〟はどうでしょうか。

まず次の、中学生が作った狂歌をお読み下さい。

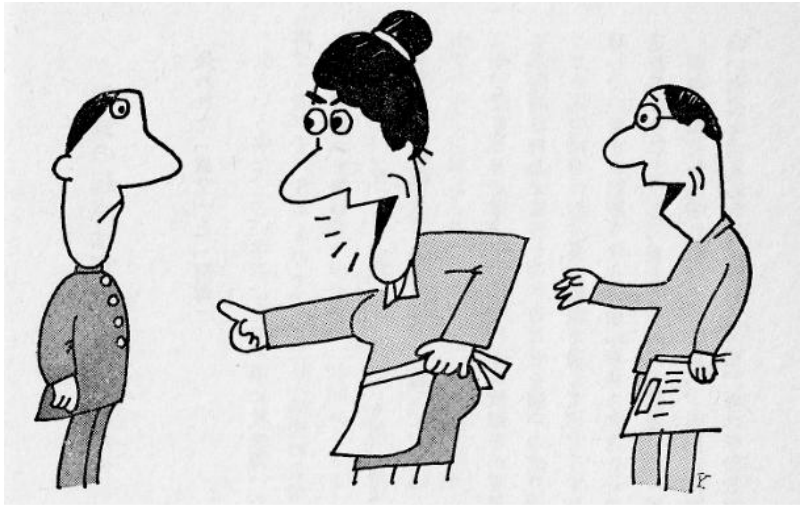
家庭とは父厳しくて母優し　それでいいのだうちは違うが（中二男）

人並に叱られてみたい時もある　俺の親爺は俺がこわいのか（中二男）

心からすがりつこうとする時に　いつも父さん逃げてしまうよ（中一女）

昔から、「厳父・慈母」と言って、この二つの言葉が示すように、厳しい父と優しい母と、本質の異なる両親があって家庭はうまく成り立っているのです。今のように、母親以上に甘い父親では、両親の存在する意味がないではありませんか。

ところで、どうして今の父親はこんなにも甘いだけの〝だめな父親〟になってしまったのでしょうか。



まず第一に、「敗戦による自信の喪失が、親としての教育の拠り所にも及んで、わが子をどのように教育して行ったらよいのか全くわからなくなってしまった」ということが考えられます。

「斧の柄を作る時には、それを作るのに現に使っているその斧が、何よりも良い手本である」という昔の諺が示すように、それまで自分が受けて来て、すっかりわが身に滲みついていることを、そのままわが子にしつけて行けば良かったのに、「それが敗戦の原因なのだ。だから、そういう考え方を一日も早く改めなければいけない」と言われますと、だれでもただ当惑するよりほかはありませんでした。

それで、それまでの厳しいしつけ教育に代って、新しく登場した考え方は、その反動として「親の考えを子どもに押し付けてはいけない。子どもの意思を尊重し、子どもの望むままに伸び伸びと育ててやることがよいのだ」という放任主義でした。

この放任主義は、自信を失った親たち、どう教育して行ったらよいのかわからない親たちにとって、この上もない魅力的な方法でした。どんなに自信のない親でも、これなら、自信？　をもって行なえるのですから。

しかし、放任が教育であるはずはなく、放任しておいて子どもが立派に育つわけがありません。そこで、あわてて教育入門書をあれこれとかじっては行き当たりばったりやってみますが、これでは子どもはますますだめになるばかりです。

こういう例が、このごろ非常に多くなっています。昭和五十三年四月まで私が勤めていた研究所（大東文化大学幼少教育研究所）のようなところは、全国にも至って数が少なく、そのせいか、教育相談に訪れる親が多く、それには以上のような親が非常に多いことがわかりました。

“だめな親”をつくった二つの原因

富士の登山には、いろいろな登山口があるように、子供の教育法にも当然いろいろな方法があります。そのどれが良いのかは、一概には言えないものがあります。しかし、自分はこうと決めたら、とことんそれで押し通すことが大切です。

あれこれと迷うのは、御殿場口から登りかけて、吉田口に変えるようなもので、教育の場合はもっとはなはだしい弊害があります。この「あれこれと迷う」自信のないだめな親は、敗戦後に特にひどく見られるようになった現象ではありますが、その遠いきざしは「明治時代の義務教育」の施行にある、と私は見ています。

すでに述べましたように、教育は、親のわが子に対する本能的・必然的な行為ですから、法律的な権利義務というもので拘束すべき性質のものではありません。そういう道徳以前のものである教育を、道徳以下のものである法律によって拘束することにした「義務教育」は、明らかに教育の堕落と言わざるを得ません。

事実、義務教育が施行されるようになってからの親は、教育のすべてを学校に一任し、教師の蔭に退いてしまいました。ただ、家風を重んずるという伝統が残っていた戦前は、代々受け継いで来た家庭教育を捨て切ってはしまいませんでした。

このように、“だめな親”の原因は、明治の義務教育という考え方に由来する、と私は考えています。ただ、有史以来、瑞穂の国の名の通り、安定した食生活のお蔭で成立した世襲制により、家族制度が発達していたので、親の強い教権が伝統として残っていました。それが、だめな父親になりかかっていた父親を辛うじて支えていたのだと思います。

ところが、敗戦を機に、家族制度が破壊され、古いものがすべて価値を失ってしまった時、親は全く〝だめな親〟になるよりほかはなかったのです。

明治時代に由来するもので、義務教育と共に親をだめにする原因となったものがもう一つあった、と私は考えています。それは、「職業世襲制の廃止」です。

子どもの個性や能力を全く無視して、親の職業を無理矢理に継がせるということは、確かに良くないことです。しかし、それは、子が親の職業を継がない方が良い、ということではないのです。

ところが、「職業世襲の廃止」は、親の職を継がなくても良い、ということから、継がない方が良い、という考えに一変してしまいました。隣の芝生は美しく見えるように、他人の職業は、人にわからぬ苦労があってもそれが見えないので、良いところばかりが見えがちです。しかし、世襲制のころは、他人の職業を羨むのは愚かなことと考えられていて、一般に自分の職業を誇りに思う、という気風がありました。

ところが親の職業を継がなくても良いということになりますと、親はわが子を少しでも楽で体裁の良い職業に就かせたいと考えるようになり、自分の職業を誇りに思うどころか、親は子に向かって、「こんな悪い職業は俺の代限りで結構。お前はもっと良い職業を選べ」と言うようにさえなってしまいました。

しかし、本来、子は親に似るものであり、子は親の性格も能力もそっくり受け継ぐものです。だから、子は親の職業を受け継いだ方が成功する確率が高いのです。

私には子が二人あります。長男は、宇宙ロケットの開発に従事しています。長男が大学に進む時、私は「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言って、子どもの選択に任せました。

しかし、長男にはなかなか職業の選択は困難だったのです。結局は、大学院で宇宙ロケットの研究をし、その結果その道に進んだのですが、それは本人の心からの希望ではなくて、指導教授の奨めによるものでした。

下の子は女ですが、私はこの子に対しても「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言っておりました。大学受験の時、学校の成績を調べてみますと、最も優れているのは国語科で、とりわけ漢文でした。

この時、私は初めて痛感しました。「蛙の子は蛙と言うが、親の得意なものは、自然と得意になるも

のだ。この得意な物を一層磨いて一層得意にすることを考えないということは何という愚かなことか」と。

娘に希望を尋ねてみますと、「医者になりたいので理科に進む」と言います。私は「お前の成績は、お父さんの専門とする漢文が最も優れている。この最も得意な学問を一生の仕事としてやっていくのが、最も良いのではないか」と忠告しました。

娘は、私の希望通り、大学で中国文学を専攻しました。娘は父親の知識を利用することが出来、父親の私も、娘と共通の話題が多く持て、娘が父親と同じ道を歩んでくれたことは、ほんとうに良いことだったと思っています。

それで、今ではこう思っています。「親の仕事を無理矢理に継がせるということには考慮が必要だが、子どもの自由に任せるということも良くない。出来る限り、親は自分の仕事についてわが子に語ってやり、理解を深めさせ、自然と親の道を歩みたくたるように仕向けるべきである。人間一代の間に出来ることは高が知れている。代を重ねてこそ大を成すことが出来る」と。

父親は自分の仕事に誇りを持て

先年、イタリアを旅行した時、靴を一足購入しました。店に入った私は、気に入った靴を見付け片足を入れてみました。靴はよく足に合っていました。それでこれをくれと言いますと、靴屋の主人は、両足に靴をはかせ、そこにしゃがみ込んで、皮の上から私の足全体を何度も何度も丁寧に撫で回しました。そして、「これはだめだ」という大きな身振りをすると、山のように積まれた箱を一つ一つ丹念に調べ始めました。私は今まで、この程度なら十分に満足していたので、「これで結構。これを貰おう」と言いますと、「それは足によく合っていない。もっとよく合うのを見付けるからちょっと待て」と言って捜し続けました。

こうして時間をかけて捜し出した靴をはいてみて、私は驚きました。その靴は私の足全体を実に見事に包んで、靴をはいたような感じがしないのです。歩いてみて重さを感じません。靴星の主人の満足げな顔を見て、これがほんとうの靴屋というものだ、と私は思いました。

こういう靴星は、一代限りで出来るものではないと思います。あの靴屋の主人は、自分の職業に誇りを持ち、生涯をかけて腕を磨いたことについて自信を持っていたのだと思います。それは、親から子、

子から孫へと、何代もかけて築き上げられたものだと思います。そしてこれがほんとうの〝教育〟だと思います。

わが国は、明治維新で、この精神を失ったと思います。自分の職業に誇りを持ち、堂々とそれについて子どもに語る父親が次第に少なくなり、敗戦後はそれが特にひどくなったと思います。だから、今の子どもたちは、父親がどんな仕事をしているか、家族のため、世のためどんな努力をしているか、父親について何も知らないという子が多くなっています。

父親について知っていることと言えば、たとえば、家でごろ寝をしていたり、テレビを寝そべって見ていたりという、頼りない姿だけです。これでは、父親を頼もしく思ったり、尊敬できるわけがありません。

父親は、積極的に自分の仕事について語るべきであり、出来れば、その腕前の良いところを子どもに見せてやるべきだと思います。そうすれば、父親を自然と尊敬するようになるだろうし、また、父親のあとを継いでその仕事をやってみようという気持にもなり、理想的な親子関係が出来上がるだろうと思われます。

そうなれば、親子の会話は自然と生まれますので、今よく言われている〝親子の断絶〟ということもなくなってしまうだろう、と思われます。

前に紹介しました狂歌の中で、子どもたちは「父厳しくて……それでよいのだ」と言い、「人並に叱られてみたい……」と言っております。もともと「叱られるのが好きだ」という人間がいるはずはありません。しかし、中学生ともなりますと、どういう行為が善くてどういう行為が悪いかは、それまでの生活経験で十分に理解しています。

また、悪いことをすれば、とがめられ、叱られるのが当然であり、子どもとしてもそれを覚悟しています。ところが、この親たちは、とがめるべき子どもの行為を見ていながら知らぬ顔をしています。「叱るべき時にも叱れない父親」「ただ甘いだけで少しも頼りにならない父親」を持ったこの狂歌の作者たちは、ほんとうにかわいそうだと思います。

子どもは、背後に、頼り甲斐のある父親を持っていて、初めて安心して強く生き生きと活動することが出来るのです。だから、見かけだけでは子どもは甘い親を歓迎しているようですが、心の奥底ではこわくても強い、厳しい父親を求めているのです。

また、そういう厳しい父親に鍛えられて、初めて、社会の荒波を越えて行ける、一人前の人間になれるのです。「かわいい子には旅させよ」という昔の諺も、厳しさだけが人間を鍛え、人間らしい人間を作る、ということを説いているのだと思います。ほんとうに子どもがかわいかったら、厳しい父親、叱れる父親になることに努めなければなりません。

乳幼児に有害なテレビ

さて、父という漢字が、教という字と関係があることを述べましたが、興味あることには、母という漢字は、育という字に関係があるのです。

母という字は、女という字の古い字形である〝〟に、乳房を表わした〝〟を加えて作られた字です。つまり、乳房から出る乳で子供を育てる母親の姿を象かたどった字です。

育という字は、生れ出る赤ちゃんの形を表わした（子を逆さにした形）に食べ物（肉）を与えて養い育てることを表わしたものです。育をイクと発音することは、肉〔nikɯ〕がこれを表わしています。

教は父親の仕事であり、育は母親の仕事であることが、漢字の成り立ちに実によく表われています。

ところで、母の発音のボは、慕という言葉に由来する、と言われています。だから、母とは、乳児を自分の乳房の乳で育てる人であり、従って、乳児に最も〝慕〟われる人でなければなりません。しかし、今の母親は、自分の乳房の乳で育てることをせず、牛乳やミルクで間に合わせています。だから、今の乳児は、あとを慕って泣くことが少なくなりました。これでは、〝母〟ではありません。

ところが、母親のあとを慕って泣かなくなった乳児を、独立心が強くて良いことのように考えがちですが、これはとんでもない見当違いです。

乳児は、出来る限り母親の胸に抱かれて、乳房を吸い、もて遊び、心臓の鼓動を聞き、あやしの言葉を聞くことが、心身共に健全な子どもに育つのに大層有益なことなのです。

泣いている幼児の耳元に、母親の心臓の鼓動を録音したものを置いて聞かせますと泣き止むが、幼児の鼓動の録音では決して泣き止まない、という実験があります。母親を慕うのは乳児の本性であって、母親がいなくなればこれを求めて泣き、母親に抱かれて、その肉声を聞き、胸の鼓動を聞けば泣き止む、そういう日常の行動の中で、乳児は外界の刺激に敏感に反応する能力を育てていくのですから、ひとり遊びする幼児に対しては、特別な配慮をしないと、そういう能力が育たず、従って心身共に健全な子ど

もには育ちません。

また、乳幼児は泣くことで発声器官も肺臓の機能も発達していくのですから、母を慕って泣くことを全くしない乳幼児というのは問題であって、喜ぶべきことではありません。

生まれたばかりのチンパンジーの赤ちゃんを、生まれたばかりのわが子と一緒に育てたアメリカの女流心理学者があります。両者を分け隔てなく育てましたが、人間の赤ちゃんは言葉を覚え、これを使うようになりましたが、チンパンジーはついに覚えませんでした。

人間の赤ちゃんは、言葉を覚えるまでは、チンパンジーの赤ちゃんほど賢くなかったそうで、言葉を覚えるようになって、急速に知能が発達したということです。つまり、言葉が人間の知能を発達させる最大の要因だという証拠で、それは今ではだれも異論のないところです。

ところが、同じ人間の声でも、テレビから出る人間の声は、乳児にとっては実に有害であることがわかりました。このごろ、自閉症的病状のある幼児が多くなったことは、全国の幼稚園や保育園の均しく認めるところです。自閉症児は、母親の呼びかけにも応じません。全く自分だけの城に閉じこもり、名前を呼ばれても返事をしないし、声の方に目も向けません。そのため、言語の習得が遅れ、知能の発達が止まってしまいます。

その上、社会性が全く発達しませんから、最後は廃人同様になってしまう、恐るべき病気です。軽いうちは、テレビを追放しただけで直ったという実例が少なくありませんが、これが亢進しますと、なかなか直しにくい難病です。

人間の言葉とは、心と心とを結びつけるものです。だから、赤ちゃんに言葉をかける時は、赤ちゃんの目を見つめ、愛情をこめて語りかけることが大切です。赤ちゃんも、語りかける人の目と口を見てこれを受け取ります。同じ言葉をくり返しくり返し語りかけることが大切です。反復によって、言葉と口の形との間に関係のあることを理解し、その口の形をまねて、その言葉を発するようになるからです。この行為ほど赤ちゃんの知能を発達させる行為は他にありません。

しかし、テレビから出る言葉は、一方通行であり、幼児の心を無視しています。幼児の目を見て語りかけてくるものでもなく、また幼児の語りかけに答えてくれるものでもありません。そういうテレビを相手に育った幼児が、何を語りかけても返答しない子になるのは当然で、実に恐ろしいことです。

品性が知能の格差を生む

私の研究所（石井教育研究所）では、四~六人の幼児を一クラスにして指導していますが、同じ三歳児のクラスでも、指導が容易な組と大変な組とあります。生後まだ三年にしかならないというのにそれだけの格差が出来てしまっているのです。

遺伝による格差もあるでしょうが、孔子が「性相近し、習相遠し」と述べているように、生後三年間の家庭教育の違いが、この格差を作っていることを、幼児たちを直接指導してみて私は痛感させられています。

しかし、問題なのは、知能や知識の格差ではなく、学習意欲や品性のそれです。入試で重視される〝知識〟は、いわば道具であって、それを使う人の品性の高い低いによってその価値も上下します。

ところが、今の母親の多くは、知性や知識を重視して、それより重要な学習意欲や品性を育てることには鈍感です。本末転倒と言わなければなりません。

「本立って道生ず」です。品性が高く、学習意欲が強い者は、知識がどんなに豊かになっても決して驕らず、いよいよ努力して止みません。ところが、品性の卑しい者は、わずかな知識でも鼻にかけて、地道な努力を怠ります。そういう品性における格差が、私の指導している三歳の幼児にすでに明瞭に現われているのです。「三つ子の魂百まで」ですから、何と恐ろしいことではありませんか。

幼児は、四六時中、母親の姿を追って暮しているのですから、自然と親の言行を見倣って、親に似るのだと思います。だから、「蛙の子は蛙」「瓜の蔓には茄子は成らぬ」と言われるわけです。

だから、親たる者は、常にわが子にまねられていることを意識して、立派な手本を示すことに努力する必要があります。昔の親は、確かにそれを意識して、気取っていたように思います。悪く言えば「猫をかぶっていた」ということでしょうが、今の若い親にはそれが全くありません。

正直と言えば聞こえが良いが、それは「馬鹿正直」というものです。悪い手本を示すことでわが子の品性を下劣にするばかりではありません。

「あの親爺大学出だのにほんとかな　どうもあやしい教養の無さ」（中三男）と、わが子に軽蔑されるようになるのです。親も不幸ですが、子も不幸です。

「猫をかぶる」「偽善」ということは、悪いことのように思われていますが、「心の欲するところに従って矩を越えず」という境地は孔子の晩年のことです。孔子も「偽言」、つまり努力して善を行ない、

それが「習、性となる」で、真の善に達したのだと思います。

文化とは、自然を磨くことです。自然のままでは文化は成り立ちません。それは人為ですから「偽」です。偽善でよいのです。気張ってわが子のために尊敬できる親の姿を見せてやろうではありませんか。

（「月刊新自由クラブ」昭和五十三年十月号）

教育の病弊

はじめに

戦争中、見習士官をしていた時のことである。私は右眼を失明し、左眼もいつ失明するかも知れないという状態に陥り、軍医から、「軍人として失格だから、兵役を解除する」と言い渡された。私は職業軍人ではなかったが、日本男子として、郷里の人々に対して顔向けが出来ないと思い、泣いて軍医に頼み、兵役にとどまることを許された。

しかし、海軍の特攻隊長として内地を出発する直前になり、「いつ盲目になるかわからぬ者を外地に指揮官として出すことは出来ない」という理由でその任務を解かれ、航空本部の副官に任ぜられ、そして終戦を迎えた。

復員して母校の高等学校の教師となったが、良い教師となるためにはまず中学を熟知しなければならない、と考えた私は中学の教師になった。ついで、指導主事になったが、小学生を自分で直接指導した経験がないのに、小・中学校の先生を指導する矛盾に耐えられず、いやそれ以上に、「小学生を指導したい」「小学校そのものを知りたい」という欲求に駆られ小学校の教師に転じた。

そして現在は、それよりも幼い幼児たちを直後指導することを主な仕事としながら、大学生にも講義を行なっている。従って私は、幼児から大学生に至るまでの、小・中・高等学校のすべてにわたり、直接指導した経験を持っていることになる。

なお、指導主事として、小・中・高校の教師たちに指導助言を与えるという特殊な経験を持ち、また、海外教育視察団の団長として、六回にわたって欧米諸国を歴訪しており、管見ではあるが外国の教育の

実際をこの目で直接見ている。

こういう広範囲にわたる体験から、私は、言いたいことをあらゆる面に数多く持っている。しかし、ここでは紙数の都合もあり、根元的な病弊と思われるものだけについて述べることにした。具体的な問題については、別の機会に譲ることをお許し願いたい。

私は、敗戦を知った時、この戦争に生き残った者の責務として、日本の弥栄を信じて死んで行った戦友に代り、敗戦日本を建て直すべき若者たちを育てる仕事に身命を捧げなければ相済まぬと考え、そのことを心に固く誓った。

私は、この筆を執るに当たって、再びその誓いを新たに思い起こした。筆は拙いが、気持だけは純粋であると受け取っていただきたい。

教育の原点とは何か

一九三〇年以降、アメリカの教育心理学者や言語学者たちの間で、生まれたばかりのチンパンジーを、わが子と一緒に、わが子と全く同じように教育する実験が、盛んに行なわれてきた。その報告によると、

① 人間の幼児は、三歳ごろまでに千数百語の言葉を覚えて、これを使うようになるが、チンパンジーには、どんな方法で教えてみても、言葉を覚えてこれを使うことが出来るようにならない。

② 人間の幼児は、言葉を覚えてこれを使うようになるまでの間は、その知的行為において、決してチンパンジーより優れていると認められる行為が見られない（むしろ、チンパンジーの方が優れていると見られる）が、ひとたび言葉を覚え出し、これが使えるようになると、たちまちチンパンジーを追い越し、引き離してしまう……という。

百万年前においては、人間の生活も、チンパンジーの生活と大して違いはなかったように思われる。しかし、チンパンジーの生活が百万年前も現在もほとんど違いがないと考えられるのに対して、人間の生活には驚嘆すべき進歩があった。

その原因は、人間だけが〝言葉〟を持っていた、ということに拠る。人間は、一生の間に営々として蓄積した知恵を、言葉によって次の世代に伝えることが出来た。だから、世代が改まるごとに向上して行ったのである。

しかし、言葉を持たないチンパンジーはその一生の間に蓄積した貴重な体験も、次の世代に伝えるこ

とが出来ないので、その死と共に無に帰してしまうのである。世代の交替は、単なる重複に過ぎないのであるから、進歩するはずがない。

この「言葉によって、人間が一生を通じて獲得した知恵を次の世代に伝える」こと……もっと簡単に言えば、「親がその体験を子どもに残してやる」こと、これが〝教育の原点〟であり、この〝教育〟が、人類発展の原動力であるということがよくわかる。

病弊の原因を探る

「日本の教育の病弊は敗戦後に始まった」というのが一般である。「親がその体験を子どもに残す」ことが教育であり、人類発展の原動力であるのに、敗戦後の日本の教育者たちは、自分の体験をすべて悪いものとしたばかりか、今まで伝え伝えて来た先人の知恵まで誤まっていたものとして、次の世代に伝えることをせず、生かじりの欧米流の教育を施して来た。歴史の異なる社会に育って来た考えがわが国にうまく合うはずがなく、そこに病弊が起こるのは当然である。

ところが、「病弊はすでに明治時代、義務教育が実施された時に始まった」という意見がある。

すでにくり返して述べているように、教育は、親のわが子に対する本能的、必然的な行為であるから、法律的な権利義務によって拘束すべき性質のものではない。そういう、道徳以前のものである教育を、〝義務教育〟などと改まった名前を付けることにより、道徳以下のものである法律によって拘束することにしたのであるから、これは確かに〝堕落〟と言えは言えないことはないであろう。

しかし、それだけのことならまだよい。ところが、義務教育の施行を境にして、それまで「親が行なう」ものであった教育が、「教育とは学校が行なうもの」という考えに変えられ、それも日本の社会を全面的に支配してしまった、というところに問題がある。

その昔、貴族たちは、学者をわが家に招いてわが子の教育に当たらせた。学問は学者に任せた方が確かだからである。しかし、学問が教育のすべてではないし、第一、任せっぱなしでは、親としての責任が取れない。

だから、昔の親は、学問においては学者に任せたが、わが子の教育のすべてを決して学者に任せっぱなしにはしなかった。以後の責任は親が取って、決して手離さなかったのである。

この、「学問は学者に任せる」形が、一家のものから、一族のものへと拡大したものが氏族学校であ

り、学校の始まりである。だから、学校とは、「親が行なうべき教育を、その道の権威が親に代ってその一部 を分担するもの」という考えが厳としてあったのである。

教育はもっとも現実的なもの

教育は、「親がその体験を子どもに伝える」という原点に帰って考えると、「教育はかくあらねばならぬ」というような、今、盛んに学者や教育者によって論ぜられている理想論・抽象論は、論としてどんなに立派なものであろうとも、所詮は〝絵に書いた餅〟である。

教育とは、もっと現実的なものである。孔子の弟子たちが、孔子に対して同じ質問を発しているが、その答えは人によって異なっている。はなはだしい場合には、全く正反対の答えさえしている。教育とは、そういうものなのだ。

ところが、教育研究会などに出席してみると、幼児や児童・生徒を指導した経験など全く持たない大学の教師が、幼稚園や小・中学校の教師たちにその指導法を論じているのをよく見かける。そこでは、幼・小・中学の教師が、児童生徒に対する具体的な指導について大学の教師に質問し、大学の教師がそれに答えている。質問する方もする方だが、答える方もよく答えるものだと、ただあきれるばかりである。

ただ一度だけ、「そういう具体的な問題については私は全く経験がないのでわかりません。むしろあなたの方が私よりも解決できる立場にあります。私の方があなたに教えてもらいたい」と答えた大学教授を見たことがある。

それが当然のことだが、わが国の教育界には、「事実よりも理論を尊ぶ」という、まことに奇妙な傾向があり、また、「幼・小・中・高・大学と、上になるほど、先生の方も偉いものである（つまり、何でも知っている）」という、これまた奇妙な傾向がある。

だから、自分でなければ解決できないはずの問題でも、ただ相手が著名な大学教授だということで質問する問題には全く無力なのに、質問して教えを乞うのである。

また、質問を受けた大学教授の方も、幼・小・中学の先生に「知らない」と答えるのは大学教授として恥辱と思うのか（勿論、少しも恥ではないのであるが）、自信あり気に答える者が多い。

こんな有様であるから、現代の教育界には進歩がないのが当然であり病弊に取りつかれるのである。

現実無視の「頭をそろえる」教育

現代の教育界には、一般に、「教育の理想は、すべての人間に、〝平等〟な学校教育（出来れば大学まで）を受けられるようにすることだ」という考えがある。従って、世の中には立派な人間がおり、だめな人間がいるのが現実であるのに、その現実を見ようとせず、能力別指導をしたり、英才教育をすることは、ひどく悪いことであるように非難する傾向がある。

しかし、「性相近し、習相遠し」と孔子が述べているように、人間を教育しなければ、遺伝的に優れている人間も、劣った人間も、それはどの差はないものである。教育することによって差が生じ、教育をうん すればするほど、その差が広がっていくのである。

子どもたちに駆けっこをさせてみるとよい。力を抜いてだらだらと駆けさせると、そろって同時に決勝点に到達する。しかし、全員に力を尽くして駆けさせれば駆けさせるほど、それぞれの差が大きく広がっていくことがよくわかるであろう。

私は、個人差がよく現われないような教育など、手を抜いた教育だと思っている。差が大きく現われれば現われるほど、それは良い教育だと思っている。

私の研究所（石井教育研究所）には、二、三歳の幼児が、母親と共に来るようになっていて、その幼児たちを私が直接指導するのであるが、この二、三歳の幼児にして、すでに同じ教育に対する反応に大変な差があるのである。

六人一グループとし、これを集団指導しているのであるが、指導すればするほど差が広がっていく。こういう指導をしてみれば、「頭をそろえる」教育がいかに現実を無視した非教育的な行為であるかがわかる。

六人の能力がそろっている場合と格差がひどい場合とでは、個人の伸びにひどい違いが生ずる。後者の場合は、素質の良い子どもの伸びも、悪い子どもの伸びも共に良くない。六人のグループでこれである。

だから、英才だけを集めて教育することも必要である。それなのに英才教育に対する風当たりが強い。「英才を集めて教育しているのではない。単に、英才にする教育をしているのだ」と断って英才教育をしている人を私は知っている。情けないことだと思う。

真の教育とは

言うまでもないことだが、「学問の出来る人間が立派な人間で、出来ない人間はだめな人間だ」とは私は考えていない。人間の能力にはいろいろな種煩があり、その中のどれか一つ、好きで得意な分野を伸ばし、その力で世の人々に貢献できる人間が立派な人間だと思っている。

数学が最も好きで、その面ではだれよりも優れているなら、他の何か不得意でもよいではないか。野球が最も好きで、その面でだれよりも優れているなら、他の何か不得意でもよいではないか。

個人個人がその最も得意とする、最も好きな面を磨いて、その面における競争相手に大差をつけるべく努力するよう指導してやることが、ほんとの教育だと思う。

学問が不得意で、学問するのが嫌いな人間を無理に大学まで進学させることなど、どう考えたって教育の理想ではない。それよりも学問に不適格なら不適格だと、出来るだけ早い時期に発見することに努めると共に、その最も得意とする道を早く発見してやり、学問に早く見切りをつけて、得意な道に専心できるように指導してやることの方が、理想に近いであろう。

「鳶が鷹を産む」という諺がある。鳶の子を鷹にすることが教育の理想のように考えられているが、これも私には賛成できない。鳶の子は 鳶の子でいた方が、親も子も幸福であり、社会も平穏である。鳶の子が鷹になったら、楽しい親子の会話、共通の話題がなくなるに決っている。

それに何より努力しても、鳶が鷹になることはなかなか出来ることではない。不可能に近いこと、また可能であっても決して望ましいことではないのに、それが望ましいことであり、望んで努力すれば可能であるようなことを言うものだから、教育が過熱し、試験地獄だの、乱塾などが起こるのである。



教育の限界を知ること

孔子は「朽木彫るべからず」と言い、釈迦は「縁なき衆生は度し難し」と言った。孔子や釈迦のような最高の指導者でも、「やる気のない人間は教育できない」と慨嘆しているのである。

教育は治国平天下のための第一の要道であることは間違いない。しかし、「孔子や釈迦でも教育できない人間がいる」という現実に目をそむけてはならない。

教育が万能でないように、学校も万能ではない。東大を出てもだめな人間はだめ、学校など全く行かなくても優秀な人間は優秀になる。「蛙の子は蛙」という現実をよく見つめよく考えることが、日本の病弊を克服する唯一の方法だと思う。

私の研究所の幼児を見て感心するのだが、二、三歳にして、実に親によく似ていることである。人間のエンジンとも言うべき〝意欲〟は全く親の生き写しである。だから、自らも伸びようと努力している親の子の成長は、目を見張らせるものがある。「瓜の蔓には瓜」である。教育は教育者ではなくて、親の自覚に因るものだとつくづく思う。

（「カレント」昭和五十三年二月号）

続・教育の病弊

「悪平等の弊」の意味

「教育の病弊」において「悪平等の弊」を挙げ、今、教育の理想であるかのように思われている「頭をそろえる教育」が、どんなに現実を無視した、誤った教育であるかを述べた。今回は、この「悪平等の弊」をもっと広く深く考えてみたいと思う。

今の学校教育では、どの学科もすべてよく出来る児童・生徒を育てることを目指して努力している。何でもよく出来る人間があっても悪いことはないがだれもがそうである必要など全くない。一個の人間として、何か一つだけよく出来るものを持っていたら、それで十分である。

数学の岡潔先生が絵が上手だとしても悪くはないが、下手だとしても、少しも悪いことはないであろう。むしろ、下手な方がずっと好感が持てると言ってよい。ところが、学校教育では、絵が下手だと、上手になるように努力せよ、と言う。音楽が悪いと、音楽の練習をうんとせよと言う。子どものあら探しをして、叱咤激励すればそれで良くなるものとでも考えているのであろうか。

勿論、不得手な学科を努力してこれを得意にするのは悪いことだ、と言うのではない。ただ、得意なものは、「もう上手だから練習しなくてもよい」と言われても、練習したくてたまらなく思い、従ってよく練習するものだが、不得手なものはなかなか練習したいという気持になれないのが人情である。それをあえて得意になるまで練習するということは、とても常人のよく出来ることではない。

そもそも、不得手なものを練習するということは、大変に苦痛を伴うものであり、苦痛だから練習を避け、練習を避けるから得意になれないのである。反対に、得意なものは、練習するのが楽しいからうんと練習し、うんと練習するからいよいよ得意になるのである。

だから、先生が音楽の不得手な生徒に、「君は音楽の才能がないようだ。練習するのが苦痛のようだから、これからはもう練習しなくてもよい。その代り、その分だけ得意な絵を描く練習をしなさい」と言ってやったらどうだろう。得意な絵が一段と飛躍するに違いない。

世の中には、いろいろな職業があって、いろいろな能力を必要としている。決して何でも出来る人間を必要としているのではない。一能のある人間を求めているのである。軍隊だって、万能の偉い大将ばかりでは戦争が出来ない。大将はただ一人あれば十分で、それよりも、一能しか持たない兵隊の方がたくさん必要なのである。

才能を摘む入試の弊

「何でも出来るのが良い」という考え方が、今の大学入試にも見られる。どこの大学でも、大学で専攻する学問には全く縁がないと思われる学科でも、入試に課している。実に多くの学科にわたって試験をするのである。

だから、専門の分野では抜きん出たすばらしい才能を持った者でも、入試科目に不得手なものが一つあっただけで合格することが出来ず、そのため、あたらその才能を伸ばせないで終ってしまうことがある。まことに惜しいことであり、残念なことではないか。

大阪外語大学で学んだ作家の司馬遼太郎氏の同期生には異才が多いと言う。その理由は、彼らの期に限って入試に数学が課せられなかったためだという意見を私は聞いたことがある。多分に頷ける意見である。もしそうだとするならば（勿論、それが理由のすべてだというのではないが）、外国語を学ぶのに数学がどうしても出来なければならないとは思えないので、入試科目から数学をはずした方がその

適格者を集めるのに適していると思う。

大学に入ってしまえば全く必要としない学問を、ただ入学試験のためだけに、いやでいやでたまらない学問を我慢してやる、という仕組みは決して良いものではない。その努力を、自分の一生の仕事に直接関係する学問、好きでたまらない得意な学問にそそぐ方が、どんなに有益かわからないからである。

入試の科目が多くなれば多くなるほど、その試験を通過する人間のタイプは似たものになる。昔の高等師範学校は入試科目が多いことで有名であった。だから、高師出身者には、一見してそれとわかるものがあった。教師の養成機関としてそれが望ましいと考えられていたからであろう。それはそれで良いと思う。ただそれだけだったら困るのだ。

高師と対照的なのが、私の学んだ大東文化学院である。入試科目はただ一つ、漢文だけであった。六年間、ひたすら漢文を専攻するのだから、漢文を読解する力さえ優れていれば良い、という考え方に依っていたからである。そのため、漢文に他より抜きん出た力を持っていさえすれば、他の学科は全く出来なくても入学試験に合格できた。その代り何でも良く出来る秀才でも、漢文の力が少しでも弱いと、落第の憂き目に逢った。

これで良いではないか。いや、この方が良いと私は確信する。専攻する学問に直接必要な力さえ持っていれば良い、という条件だけにすれば、多彩な人間が集まる可能性が高くなる。事実、私の同窓生には、漢文専攻でありながら、軍人もいたし、医者もいた。私の同期生十九人の中にも、師範学校の現役教授で、受験し合格したので退職して入学した、という者がある。また、作曲を得意とする者もいて、これは結局音楽家としての道に進んだ。漢文は極めて得意だが、それしか出来ないという者もいれば、多能の者もいた。

「君子は多能ではない」と孔子は言ったが、それは多能である必要がないという意味であって、多能であってはならぬということではない。しかし、孔子が多能を尊ばなかったことだけは間違いない。

類のない国語軽視のわが国

悪平等の弊は、学校教育における教科の編成と、時間配当においては「国語軽視」となって現われている。あるいは「国語は重視されている。その証拠に国語の学習時間数が諸教科の中で最も多い」と言って反対する人があるかも知れない。

国語の時間が最も多いことは事実である。だが、国語の時間の、全体の学習時間に占める割合は四分の一から多くて三分の一しかない。諸外国では、全体の半分もしくはそれ以上を国語が占めているのである。

わが国では、小学校の一年生から社会科や理科など多くの教科を設けて、間口の広い学習をさせている。間口の広いこと、それ自体は決して悪いことではないが、そうすると一教科に割当てられる時間数が少なくなる、という弊を避けることが出来ない。

とりわけ、わが国では、数多い教科を、それらにさほどの軽重もつけずに時間を割当てているため、重要な教科ほど学習時間が足りなくなっているのである。

外国では、どこの国でも、三年生までは社会科や理科などの教科を立てずに、あらゆる教科学習の基礎である国語学習に、重点的に多くの時間を割当てている。その一例に、東ドイツの三年生の教科とその学習時間を次に示してみよう。

週あたり時間総数　二十四時間

国語科	十四時間
算数科	六時間
図工科	一時間二十分（四十分×二）
音楽科	一時間二十分
体育科	一時間二十分

三年生までは五教科しかないのである。しかも、図工・音楽・体育の三教科の合計がわずか四時間にしかならない。それに引きかえ、国語は一教科十四時間も占めているのである。一時限を四十分とすると、これは二十一時限に当たる時間である。毎日、三時限もしくは四時限が国語学習の時間だということになる。わが国では、毎日、一時限もしくは二時限しかなく、合計が七時限であるから、東ドイツはわが国の三倍も国語学習に時間を当てていることになる。

しかし、これは東ドイツに限ったことではない。西ドイツも、またイギリスもフランスも、ソ連も中共も、ほぼこれと同じ程度の「国語科重視の教育」をしている。ひとりわが国だけが「国語科軽視」の教育をしているのである。

考えていただきたい。社会科の学習でも理科の学習でも、まず教科書を〝読み〟これを理解できない

ことにはその学習を進めていくことは不可能である。だから、どんなに社会科や理科の学習時間を多く設けてあっても、〝読み〟の能力が低いことには、教科書に述べられている内容を理解することが出来ず、仮に出来たとしても、その理解は不十分なものに決まっている。

また、〝書き〟の能力が低くては、どんなにりっぱな研究が出来たとしても、それを正確に表現することが出来ず、記録できないことには学問としての完成はなく、従って学問の発展はない。

〝読み〟や〝書き〟は、社会科や理科を初め、あらゆる教科の学習を進めていくために絶対に必要欠くことの出来ない能力である。だからこそ、どこの国でも、全体の学習時間の半分、もしくはそれ以上もの時間を国語科に割当てているのである。

ところが、わが国では国語科を他の教科と全く同列に扱い、時間を総花的に配分したため、世界に類例のない「国語科軽視」の教育になってしまった。その結果、高校はおろか、大学を卒業しても、新聞も満足に読めず手紙一つ書けない者が多いという、情けない現状を招いた。

それは明らかに〝読み・書き〟学習の足りないことの結果であり、それはわが国に瀰漫している「悪平等」の教育観が招いた病弊である、と言わなければならない。

読み軽視の国語教育

「悪平等の弊」は、国語教育そのものにも及んでいる。戦前の国語教育は、「読み重視」の教育であって、教科書の名前も〝読本〟であったし、教科名も〝読み方〟であった（書き方・話し方という教科名もあったが、話し方は低学年にはなく、高学年でも週にわずか一時間しかなかった。書き方は全学年を通じてあったが、週に一時間、多くて二時間であった。それに引さかえ、読み方は全学年を通じ、毎日あった）。

戦後、アメリカの教育の影響を受け、〝話す・聞く・読む・書く〟という四つの学習活動を並列させ、特に〝話す〟学習に重点を置くように変えられた。アメリカは多民族から成る国であり、それぞれの家庭ではいろいろな言語が語られている。だから、どうしても共通語である英語を〝話す〟教育に力を入れる必要がある。しかし、一民族一言語のわが国では、〝話す〟教育に力を入れなければならない理由がない。それにもかかわらず、話す教育に力を入れるように改め、その分〝読む〟〝書く〟教育が疎かになった。

これは、わが国特有の、〝猿真似〟による弊とも見えるが、その根底には「悪平等」の教育観が潜ん

ている、と見てよい。つまり、〝話す・聞く・読む・書く〟という四つの学習活動を平等に見て、これを平等に扱い、〝読む〟ことが〝話す〟〝聞く〟〝書く〟能力を育てる原動力であるという戦前の〝読み方〟重視の教育を、偏重教育と考えたものである。

人は五官を通じて外界から知識を吸収しているのであるが、調査によれば、〝読む〟ことによって得るものが八十三パーセント、〝聞く〟ことによって得るものが十一パーセント、その他が六パーセント、という比率になっている、ということである。

また、人によって記憶の仕方に、視覚型優位のものと聴覚型優位のものとがあるが、一般的には〝視覚〟による記憶の方が強く残ると言われていて、〝読む〟ことによって得る知識の方が、〝聞く〟ことによって得た知識よりも、記憶の保特率が高く、正確であることが定説にな っている。

だから、〝話す〟〝聞く〟能力の根底にある語彙力を養うのには、〝話す〟〝聞く〟学習をすることよりも、むしろ、〝読む〟学習をすることによって養う方が有効なのである。

話すテクニックがどんなに巧みであっても、内容の貧弱な話では、誰も耳を傾けようとはしないものである。反対に、内容の充実した話なら、話し方はどんなに下手であろうとも、喜んで耳を傾けるに違いない。

〝話す〟技術は、〝話す〟ことによって磨かれるが、内容を高めることは不可能である。内容を高めるには〝読む〟ことを重ねるよりほかはない。戦前低学年では〝読み方〟学習ばかりして、〝話し方〟がなかった所以である。

読み書き同時教育の誤り

戦前の教育にも大きな誤りがある。〝読み〟と〝書き〟を同時に学習させていることである。私は十四年間にわたって、〝読み〟と〝書き〟とを分離して学習させる方法を試み、同時教育とその効果を比較してみた。

まず〝読み〟に習熟させ、漢字の字形が頭の中に鮮やかに描くことが出来るまで待って、〝書き〟の学習に進めるのである。漢字は、〝読み〟に限って言えば、低学年でよく覚えるし、字形の複雑な字の方が記憶の手がかりが多いので覚えやすいことがわかった。

だから、どんなに漢字の多い文章を与えても、一年生は困るどころか喜んで読む。私の研究所では、

三歳の幼児が、六年生の教科書よりも漢字の多い文章をすらすらと読んでいる。かなが多い文章ほど、漢字の少ない文章ほど、読みにくそうである。

一年生は学習漢字が七十六字だが、五百字与えてもやすやすと覚えて読めるようになる。〝読む〟学習を重ねて半年もすると、字形が頭の中に鮮やかに描けるようになる。そこで〝書く〟学習をさせると、従来の十分の一の学習時間でりっぱに書けるようになる。

〝読み書き同時教育〟は、労ばかり多くて効果の少ない方法である。〝読み先習〟にすれば、労が少なくなって効果が大きくなる。〝読み〟が〝書く〟能力を育てる原動力である点では、〝話す〟〝聞く〟場合と全く同様である。

〝本立って道生ず〟である。何か根本であるかをよく見極め、その根本を培うことに努めることが大切である。国語が根本教科であり、国語では〝読み〟が根本である。今の教育の病弊は、この〝根本〟が立たず、根本を培うことを全く知らないことがその最たるものである。これも「悪平等の弊」のなせるわざなのである。

（「カレント」昭和五十三年五月号）

討議・幼児の漢字教育をめぐって

出席者（五十音順）

荒川浩和（東京国立博物館・漆工史）　鈴木重信（神奈川県教育センター顧問）

石井　勲（大東文化大学幼少教育研究所長）　原田統吉（評論家）

市原豊太（独協大学・仏文学）　森岡健二（上智大学・国語学）

小堀杏奴（随筆家）　山本幹夫（帝京大学・公衆衛生学）

小堀桂一郎（東京大学・比較文学）　ジュームス・L・スチュアート（アジア財団日本代表）

（出席者の肩書は昭和五十三年当時）

市原　それではこれから石井勲さんのお話を伺いたいと存じます。「幼児の漢字教育をめぐって」という題でございます。石井さんは多年小学校の教育に携わりながら、幼児が漢字をどういうふうにして覚えるかを研究され、さらにその成果を幼稚園の児童にも及ぼしてごらんになり、たいへん顕著な効果を持つことを経験なさいました。またそれと同じようなやり方によって、猿にあるフィギュアを見せま

すと、まるで字を読むのと同じように行動ができるというような、そういうこともなさっていらっしゃいます。きょうはそれらのことも含めて、漢字というものが実に不思議なものであるということをお話し下さると思います。それではお願い致します。

幼児にとって漢字は興味の対象

石井　幼稚園における漢字教育の実施を提唱してその実験を始めましてから、今年でちょうど十年目になります。この十年間に漢字教育を実践する幼稚園は年ごとに増えて参りまして、いまではおおよそ三百園に達しております。幼児にとって、仮名よりも漢字の方がずっと覚えやすいということが、幼児教育者によって次第に理解されてきたためだろうと思われます。

明治以来いままで、「幼児には仮名はやさしく覚えられるだろうけれども、漢字は難しくてとても無理である」と考えられていまして、仮名で読み書きができないうちは決して漢字を教えることを致しません。ところが実際に教えてみますと、幼児は漢字の方をはるかに容易に覚えます。いま「幼児は」と言いましたが、実は大人もそうです。私どもはすでに仮名を（あるいはローマ字を）覚えてしまっているので、その難しさがわからないのですが、試みにある符号にある音声を与えて、それを覚えて下さい、といったら、まずそう簡単には覚えられないと思います。実はそういう実験をしたことがあるのですが、もうみんな駄目なのです。

大体において、文字とか言葉を覚える能力は、幼児期がいちばん強いのです。記憶には、論理的な記憶の仕方と機械的に丸暗記する仕方と二通りあり、学習心理の方では、前者を論理的記銘、後者を機械的記銘と名付けていますが、この機械的な丸暗記による記憶力が、幼児期には非常に強いのです。亡くなられた大脳生理学の時実利彦先生のお説によりますと、三歳くらいまでが最も強く、三歳を過ぎるとあとはもう低下する一方だとおっしゃっていらっしゃいました。私の研究所では、三歳からの幼児を六人ほどで一組にして、それを私が指導しているのですけれども、時実先生のおっしゃっていることはまったくその通りだと感じております。

一般的に言って、仮名は、三歳ごろまでは興味の対象となりがたく、いくら教えても覚えないのが普通です。しかし漢字の方は、三歳になれば充分に興味の対象となるので、どんな子どもでも容易に覚えるのです。記憶には関心の原理と反復の原理があり、これを記憶の二大原理と言っていますが、関心が

ないことには記憶というものは成立するはずがありません。その意味で、単に音声しか表わさない文字、つまり仮名は幼児には関心の対象になりがたく、したがって覚えがたいわけです。それに対して、漢字は内容がありますし、とりわけ幼児の興味の対象になるような内容を持った漢字、たとえば苺の好きな子どもに「苺」という漢字を示せば、それを見た瞬間にかなりしっかりと頭の中に印象づけることができるようです。数秒間見せただけでも、翌日テストしてみると、大体八〇パーセントの幼児が記憶していて、「いちご」と読みます。文字の学習において、関心を持つということがどんなに重要なことであるかがよくわかります。

もう一つ、漢字が覚えやすい理由として、字形の複雑さがあります。いままで字形の簡単なものはすぐ覚えられるけれども複雑なものは難しいと考えられていました。なるほど書きやすさから言えば字形が簡単な方が確かに書きやすいでしょう。しかしそれがどんな意味の字であるかを知るだけなら、むしろ複雑な方がいいようです。それは人の顔を覚えるのと同じだと思います。複雑な顔をしている人ほど覚えやすいのであって（笑）、複雑だということは、それだけ特徴があって印象深い、ということなのです。だから、実際に子どもに教えてみますと、鳩だとか鶴だとか亀という字は、容易に覚えてしかも忘れません。翌日尋ねてみてもちゃんと覚えていて読みます。字形の簡単なものは、特徴がなくて印象が浅いせいか記憶しにくく、また覚えても忘れやすいようです。

したがって、幼児の興味を引くだけの具体性を持ち、印象に残りやすいだけの字形の複雑さを持っているということで、漢字は幼児にとって覚えやすい文字である、と言えるのではないかと思います。

生後八か月から漢字を……

いくつかの実例をあげてお話を進めていきたいと思います。沖縄で石井式漢字教育を推進している又吉信一氏は、長男の孝旨君に生後八か月の頃から漢字を教え始めたそうです。半年間に二百字を識別できるようになり、発音こそ明瞭ではありませんが、一歳半くらいでそれらの漢字を読めるようになったといいます。一歳半では言葉はまだよくはしゃべれないものです。言語学者の言うところによりますと、一歳半までに三十から四十くらいの言葉を覚えるのがせいぜいで、とても二百などという言葉が覚えられるものではありません。それが漢字を教えますと、片言ながら二百の漢字を覚えてこれを読むようになったのです。

生後八か月頃というのは、「あーあー」とか「うーうー」とか言い始める時期で、その頃から人見知りを始めます。人見知りするということは人の顔が識別できるということであって、それは相当に目の力が発達したということなのです。顔なんていうものはみんな同じようで、それほど違いがあるものではありません。だれでも目は二つ、鼻は一つです。ただ鼻の下がちょっと狭いとか伸びているとか、そんなわずかな違いがあるだけで、大体誰でも似ています。しかし、それが母親とそうではない人とを識別できるということは、かなり識別能力が高くなっているということです。そういう時期に、一定の音声と一定の字形とをいつも一緒に見せながら発音して聞かせますと、その音声と字形とが結びついて覚えられるようです。又吉氏に聞きますと、それを根気よく毎日何回かやったのたそうですが、それで漢字を覚え、識別能力がどんどん発達していったようです。

それから、韓国の、かつて天才児だと騒がれた金雄鎔君の場合も、やはり生後八か月頃から母親に漢字を教えられたということです。六十枚の漢字カードを与えたところが二日で全部覚えてしまったということもあるそうですが、はじめは一日に一字ずつ教え、それから二字、三字と増やして、ついには二十字でも三十字でも覚えるようになったようです。金雄鎔君の場合、三歳のときにはもう三千字ほどの漢字を覚えて、どんな本でも大体読めるようになっていたということです。その後七歳でアメリカの大学を受験し、合格して入学した、と聞いていますが、それ以後の消息は私は知りません。

次に、現在三十二歳になる私の長男がまだ一歳だったときのお話をしたいと思います。私が炬燵にはいって本を読んでおりましたら、長男が膝の上に這いのぼってきたものですから、その本を、表紙を上にして伏せて置きました。彼は私の膝におさまって、その本――『国語教育論』という題名でした――をじっと見ていたのですが、いきなり「教」を指して「きょう」と言いました。私は非常にびっくりしたのですが、偶然ということもあると思っていましたら、その隣りの「育」を指して「いく」と言いました。私は早速家内を呼びまして、「こんな字を教えたのか」となじるように尋ねました。家内はあっけにとられた顔をしていました。「私は教えた覚えはないし、どうしたってお前が教えたと考えるしかない」と言いますと、しばらくして、「そう言われてみれば、そんなことがあったかも知れない」と言いました。どういうことかと言いますと、家内がその頃読んでいた雑誌に「教育音楽」というのがあって、その表紙の文字を「なあに、なあに」と長男がしきりに尋ねたものですから、「きょういくおんがく」と読んでやった記憶がある、というのです。しかしそれにしても、たった一回そんなふうに教えた

だけで覚えられるものだろうかと不思議に思いました。いまではそれは充分にありうることだとわかるのですけれども、当時はとても考えられないことでした。だから何か特別なわけがあってそういうことができたのだろうくらいで、それ以上深くは考えてみませんでした。それに関心をもって追究していればもっと早く面白い研究ができたのではないかと、今でも残念に思っております。

ある脳障害児の例

幼児と漢字との関係について、こういうこともございます。昭和四十九年の夏、私は愛知県に住む方から、その長女の愛子という四歳五か月になる脳障害児の指導について相談を受けたことがあります。愛子ちゃんは、生後一年半くらいのときに、親のちょっとした油断からダンプカーにはねられ、頭蓋骨陥没という瀕死の重傷を負い、一か月の危篤状態が続いた後、奇跡的に助かった子どもです。しかし、その後遺症として、体が不自由、頭の働きが悪い、という子どもになってしまいました。それも重度の脳障害児ですから、学齢に達しても就学できません。それで、家で一所懸命になっていろいろ教えているのだけれども、たとえば「あいこ」の「あ」という字をまず読めるようにしてやりたいと思い、毎日根気よく教えているのだが、一年たっても覚える様子がない。そういう子だけれども、どうにかなるだろうか、という相談です。

実は、昭和四十九年の五月頃に、アメリカのグレン・ドーマン博士が『親こそ最良の医師』という本を出版しました。それには「いかにして脳障害児を治療したか」という副題がつけられていて、そういう子どもを持つ親たちに非常に読まれたものなのです。その本に私のことが書かれていたものですから、石井なら脳障害児の治療ができるのではないかと考え、それで私に相談に来たらしいのです。

私は、「仮名を教えたってとても覚えられるものではない。しかし、漢字なら必ず覚えられる」と言って、次のような教え方を示してやりました。まず、子どもによくわかる内容の漢字を選んでそれをカードに書き、大きな声で三回読んで聞かせる。そしてそれと同じことを二、三分後に繰返して行なう。さらにまた二、三分後にもう一度くり返す。漢字を見せる時間は数秒間でいいのですけれども、このように、二、三分おきに三回繰返してカードを読んで見せる。この繰返しを一日のうちに五回やると必ず覚えます。そういうことを、愛子ちゃんの両親に教えてやりま した。

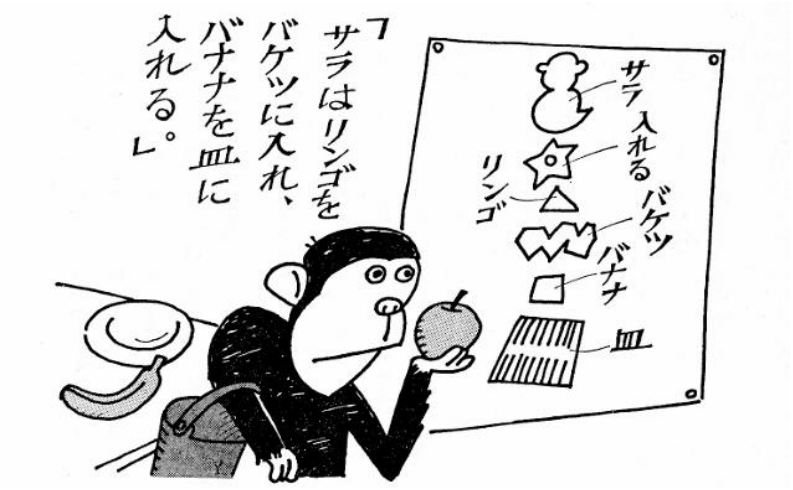
この学習で、愛子ちゃんは一日にほぼ一字ずつ漢字を覚えていきました。「一週間に、足・耳・犬・

猫・雨・鶏・舟の七字を覚えた」という、父親の歓喜に満ちた手紙を受け取ったときのことを、私は忘れることができません。正直言って、私もそこまでいくとは考えていなかったものですから、非常に驚きました。その後愛子ちゃんが二年間に覚えた漢字は三百数十字に達したといいます。この数は、五、六年生が二年間に学習する漢字の総数に匹敵します。しかも、小学校では漢字学習には相当力を入れてやっているのですが、それにもかかわらず八十点とれる子どもはいい方で、百点の子はなかなかいません。クラス平均が七十点までいったらいい方です。それを愛子ちゃんは、二年間に三百数十の漢字覚えてしまったのです。実にすばらしいことだと思います。漢字を覚えることにおいては、頭のいい悪いはあまり関係ないのであって、私はどんな子どもにでも覚えられるものだと思っています。愛子ちゃんや、そのほかの実例によって、「人間は、誰でも漢字は覚えられる」と言っていいのではないかと思っています。（詳細は第四巻参照）

チンパンジーを使った実験

実は、私も、チンパンジーに漢字を教えてみたい、とかねてから思ってはいるのですが、わが国ではチンパンジーを育てることはたいへんで、なかなか実行に移せません。アメリカではそういう実験がなされていて、実にすばらしいことだと思います。「サイエンス」という雑誌に、五、六年前でしたか報告されたものがありますので、それをちょっとご説明したいと思います。（上の図参照）

プリマックというアメリカの学者が、生まれて間もないチンパンジーにサラと名づけて、自分の子どもと一緒に育てながら、言葉や文字を教えることを試みました。言葉は全然覚えないのですが、文字――と言ってもご覧のように、図形による符号ですが――の方は覚えて、それを使いこなすまでになりました。図をご覧下さい。サラ、つまり「私」に当たる内容の言葉を猿のかたちをした図形で表わしています。「入れる」という動作を星型の図形で、「りんご」は三角形で、



というふうにして単語を作り、まずこれを覚えこませます。次にそれらを英文法に則って構文することを教えます。これらの単語を表わす図形は、裏に磁石をつけたプラスティック製のもので、鉄製の黒板に張りつけるようになっています。

もう四年くらい前になりますが、私がアメリカへ参りましたときに、このサラというチンパンジーが学習しているところを記録した映画を観ましたが、実に見事に人間と問答するのです。単語を百五十語くらい覚えて、これを完全に使いこなします。たとえば、赤いりんごを見せて「このりんごは青い」と文章で示しますと、「ノー、このりんごは青くない、赤い」と、英語の文法に則り単語を並べるのです。また、「お前はバナナとりんごとどっちが欲しいか」というふうに単語を並べると、りんごが食べたければ「りんごが欲しい」という返答をするのです。それから、チンパンジーがタイプを打つと、やはりこういう種類の文字が壁面に表われて、人間とチンパンジーがそれを見ながら会話することができるという、ジュアン・ランボーという学者の報告が、「リーダーズ・ダイジェスト」（昭和五十一年十二月号）に掲載されました。とにかく 視覚言語は耳で聞く言語よりも覚えやすいことが、これによっても証明されているのではないかと思います。

音声言語と視覚言語

私もこれに似た実験をしております。私は八王子に自分の研究所を持っておりますが、そこでいろいろな実験をしたいと思いまして、精薄児の学級を設けました。チンパンジーを使った実験がアメリカでどのくらい行なわれたかわかりませんが、チンパンジーが、音声言語は覚えられないけれども、視覚言語は覚えられるということは、いま申し上げたプリマック夫妻とジュアン・ランボーの実験で立証されているわけです。重症の脳障害児の場合も言葉は覚えられません。言葉というものは、言うまでもなく発声すると同時に消えてしまいます。たとえば、「鳩」という簡単な言葉にしたところが、「は・と」という二つの音声から成っておりまして、「は」という音声が出てくるときはまだ「と」は出ておりませんし、「と」が耳に聞えたときには「は」はもう消滅しているわけです。「は」と「と」を一緒にまとめて、しかもそれに「鳩」という意味を結合させることができなければ、頭の中に言葉として記憶することはできません。ですから、知恵遅れのひどい子どもには言葉がなかなか覚えられないのは当り前だと思います。

ところが、視覚言語は消えてなくなりませんし、視覚的なものですから、たとえば、鳩なら「鳩」と

いう漢字とその実体とを、同じものなのだと言って教えてやれば、どちらも視覚的なものですから、この二つは必ず結びつきます。「漢字は視覚的なものだから、覚えるまで消えないで待っていてくれる」――これが言葉と違う点です。ひどい脳障害児の場合でも、言葉はなかなか覚えないのに、漢字だと覚えられるわけです。

私は実際にそういう指導の仕方で、最初はたとえば、時計なら「時計」という字と時計そのものを示しまして、これとこれは同じなんだよと身ぶり手ぶりをしながら教えてやります。そうすると「時計」という漢字と、実体としての時計とを結びつけることができます。水を教える場合には、水飲み場へ行き、水を実際に流して水に触れさせ、「水、水、水」と言いながら「水」という字を教えます。池を教えるときには、子供を池に連れていって、「これが池だ」とくり返して言いながら「池」という字を見せ、これとこれとは同じなんだと言って教えます。そうしますと、その漢字が何を意味するかは、そんなに苦労せずに覚えます。言葉は覚えられなくても、漢字は覚えられるのです。

こうして子どもたちが漢字を二十字、三十字と覚えるようになりますと、今度は言葉が言えるようになってくるのです。漢字を読む脳の働きが脳の働きを高めるのです。大脳生理学的に言えば、図形を認知する神経中枢と音声を扱う神経中枢とが神経繊維により結びついて、その間をパルスが行ったり来たりするようになり、頭の働きがよくなるわけです。同じことを何度もくり返すことによって神経繊維が太くなり、パルスが通じやすくなるのです。

現実に、口がきけなかった子どもが口をきくようになるのを見て、私もこれには驚きました。「言葉は誰にでも覚えられるけれども、文字は難しいのでそうはいかない」というのは、全く誤った考えであるということが、以上のことから明らかです。

言葉は、人類がこの世に現われたときからおそらくあったと思います。ですからずいぶん長い間、人間は言葉を操ってきました。それに対して文字を発明したのは、たかだか数千年で、とても一万年にはならないと思います。そして現在でもまだ、地球上の人類のうちの半分ぐらいしか、文字が操れないのではないかと思います。つまり文盲がまだ多いわけで、そういう事実が、文字は難しいという考えを一般の人々に植えつけているのです。

漢字学習は知能の発達を促す

しかし、文字は難しいから覚えられないのではなくて、文字を覚えるべき時期に教えられないから覚えないのだと私は思います。そういう時期に覚えさせれば、文字を覚えることはたやすいことです。言葉を覚える能力のないものでも文字は覚えられるのですから。特にひどい脳障害児でない限り、子どもたちが言葉を覚えるのは、幼児期に絶えずそれを反復して耳にしているからなのです。やさしいから覚えるのではないのです。一方、漢字は誰も赤ちゃんに教えるなどということをしません。だから、漢字は覚えられないのです。しかし、又吉信一氏のように、まだ八か月にしかならない赤ちゃんでも漢字を教えてみると、普通なら言葉がまだ三十か四十くらいしかしゃべれない頃なのに、もう三百の漢字が識別できて読めるようになるのです。漢字の方が言葉よりもはるかに覚えやすい、ということは間違いなく言えると思います。

ただ、こういう事実をすぐさま学校教育に取り入れることは難しいと思います。しかし、私はこれから百年後の日本、いや世界では、文字はもう赤ちゃんのときから教えられるようになるだろうと思います。文字は、幼児期には実に能率よく覚えるものであり、また文字は言葉よりも思想をはっきりと表わすものでもあります。それに言葉と文字とを比較しますと、言葉は人によって発音が違ったりして不安定なのですが、文字はいつも一定で安定度が高いからです。

それからもう一つ。たとえば、「手」「受」「授」という字があります。これらの文字の発音は、現代の中国語音では三つとも［shou］という発音なのです。元来、［shou］という発音の言葉は、手そのものを表わす言葉だったのですが、手は受けとる道具でもあり、またものを授ける道具でもあって、だから、［shou］という言葉が「受」をも意味し、また「授」をも意味するようになったのです。それでこれを文字として記録するときは、「手」と「受」と「授」と、区別して書くようになったのです。文字が作られるときは、必ずその言葉に対応して作られるのですけれども、発達していくと、その使い方、意味がいろいろに分かれていくようになるので、同じ言葉でも文字としては書き分けた方がよい、ということになるわけです。

これは日本語においてもまったく同じです。「ハナ」という言葉がありますが、これは元来「端」という漢字の意味の言葉です。つまり、突き出たところを意味する言葉です。私どもの顔の真中にある鼻も、突き出たところですから「ハナ」というわけです。花も草木の突端に咲くので「ハナ」と言うのだ

と思います。それから鼻から出る洟という字もあります。私どもは、「ハナ」という言葉を、現在四つの漢字で書き分けているわけです。いちいち「顔の中にあるハナ」とか「草のハナ」とか「ハナから出るハナ」とか言わないで済むわけです。そういうわけで、文字＝漢字が出現することによって、思想がより正確に、しかもわかりやすく表現できるようになったのです。ですから、そういう漢字を三歳ぐらいのときから学ばせますと、自然と頭の働きが良くなるようです。

実は、そういう漢字学習をするようになった幼稚園では、知能テストをしますと、以前に比べてＩＱが三十ぐらい違ってきた、という報告があります。川崎のある幼稚園では、漢字教育をするようになってから、ＩＱの平均が一三〇ぐらいになったといいます。普通、一三〇などという知能指数は、クラスに何人もいるような数値ではありません。それから松本のある幼稚園も、園児は選抜しないで志願者は誰でも入れているそうですが、卒業時の知能テストでは、平均一六〇になっているそうです。普通でしたら千人に一人もいないような高い数値です。ところがここの幼稚園の報告によりますと、ここ七、八年は平均が一六〇を下らないということです。

アメリカにおける漢字教育

それから昭和五十一年の夏のことですが、「ドーマン博士の幼児開発法」で有名な、フィラデルフィアの人間能力開発研究所を訪問したことがあります。そのとき、そこで、アメリカの三歳の幼児たちが、「鳩」とか「鶴」というような漢字を学習していることを知りました。このことを私は知らないで行ったのですが、漢字教育もやっているというので、その教室を見せてもらいました。そこには日本の高校生でも読めないような漢字がカードになって用意されていました。どういう教え方をしているのか知りたかったのですが、夏休みだったため知ることができませんでした。それにしても、そういう漢字を三歳の幼児が学習している、ということだけは知ることができたのです。ドーマン博士が日本へ来たとき、私は、漢字教育の効果についていろいろ話をしました。おそらくそのときの話からドーマン博士はこの漢字教育を始めたのだと思います。

英語を話す国ですから、もちろん鶴に当たる言葉は crane という綴りで学習します。しかし crane という綴りでこの言葉を学習するよりも、漢字で学習した方が早く言葉を覚えて、crane よりも鶴の方が早く読めるようになるそうです。すでにロサンジェルスでそういう実験をやった人がいるということ

を聞きました。要するに英語を漢字で学習するわけです。アルファベットで綴られたものが読めるようになるのはなかなか難しいことですけれども、漢字だと、すぐ読めるようになるということです。

それから、crane という綴りで習った子どもは、これが鳥の仲間であるということを教えられない限りわからないのですけれども、漢字で習いますと、[krein]が鶴、[pidʒən]が鳩ですから、これらは同じ仲間だということが、ひとりでに理解できるチャンスがあるわけです。また、まだ教わらない字が出てきても、これはよくはわからないけれども、鳥の仲間であるという見通しだけはつくわけです。この見通しをつけるということはすばらしい能力であって、それを幼児のときから養っておくと、いよいよその能力が増していくわけです。

ですから、早期の漢字教育は日本だけでなく、どこの国でもやれることだと思います。特に漢文の構造からみると、これを英語で読む方が私どもが日本語で読むよりもはるかにやさしいと思います。たとえば、「私はあなたに本をあげる」と言うとき、「我与汝書」（我は・与える・汝に・書を）という中国語は、英語ではまったくその通りに。'I give you a book.'と読むことができるのです。またこれを「私は本をあなたにあげる」というふうにします と、我々は「我与フニ書ヲ於汝ニ一」というふうに行ったり戻ったりして読み、しかも「於」の字は読まないようにしています。ところが英語では、'I give a book to you.'となって、「於」は to に当たるものだとわかります。ですから、日本が長い年月をかけて、あっちへ行ったりこっちへ来たりするような読み方でようやく漢文を自分のものにしたのに対して、アメリカなどはすぐにでもできるのではないかとさえ思います。

ドーマン博士の場合は何を目的でやっているのか、私にはまだわかりません。おそらく英語を漢字で学習することによって、ものを見通す力、知能を向上させるのが彼の狙いではないかと思います。そしてそれがいい成果をあげれば、私なんかが騒いでいるより、日本でももっと注目されるのではないかと思います。（笑）

私の話は一応この辺でやめて、あとはご質問を受けたいと思 います。

●　●　●

市原　どうもありがとうございました。漢字の持つ大きな力について、また漢字の早期教育が幼児、あるいは場合によっては精神薄弱児の知能の発達を従し、それによって話ができなかったのができるようになったというような、非常に興味深いことがらについてお話いただきました。これについて皆さん

からご意見なりご質問なりをいただきたいと思います。

漢字で 教える意味とは何か

小堀（桂）　きょうのお話の方式で感字教育をやっている幼稚園の現場では、具体的にどういう教授法をとっていらっしゃるのでしょうか。

石井　幼稚園の漢字教育には、漢字で教える立場と漢字を教える立場の二つがありますが、私の方からは、最初は漢字を教えることは考えるな、漢字で教えていればいいのだと指導しております。たとえば、我々は家庭で子どもに言葉の教育をしているかというと、意識的にはしておりませんね。「これが眼鏡というものだ」とか「これは時計というものだ」というふうには教育しておりません。実際には、「だめじゃないか、時計をいたずらしては」とか「ちょっと眼鏡を取っておくれ」とか言って、時計や眼鏡という言葉を知らない子どもに対して、すでにこの言葉を知っているものとして使っていることが多いと思います。そして、子どもはそういう生活の中で、「あ、これは眼鏡というものか」、「これが時計というものか」というふうにして言葉を覚えていくわけです。

それと同じように、漢字も意識して教える必要はないと思うのです。幼児の場合は生活指導が非常に重要ですが、たとえば「手を洗う」ことを教える場合、いままでの幼稚園教育では、こういう場合には手を洗いましょうね」と幼児の耳にしか訴えないわけです。ところが、耳で受け取るくらい難しいことはありません。口で言う言葉は次から次とすべて瞬間的に消えてしまいますから、幼児にとっては、かりに十回聞いたってなかなか受け取れるものではありません。ところが、黒板に「手を洗う」という字を書きますと、子どもたちは「おや、何を書いたのだろう」というわけで、いたずらしておった子どもも黒板の方を見ます。「こういうときには手を洗うんだよ」と、その言葉を使う度に、その字を指しながら教えるのです。子どもの目と耳が教師の方へ向かえば、その習得率は非常に高いものになります。

実は、アメリカのゼネラル・モーターズでしたが、学者に調査させたものが、日本生産性本部の報告書に載っていました。耳から吸収した知識は三日後には十パーセント、目からのものは二十パーセント、耳と目の両方から吸収したものは六十五パーセントになるという数字です。この報告は、私は偶然目にしたのですけれども、やはり視覚言語と聴覚言語の両面から子どもに働きかけなければいけないのだという思いを強くしました。子どもというものは、とりわけ目をたえず遊ばせているものですから、そ

のような子どもにただ話しかけたって受け入れられるものではありません。それで黒板に漢字で書くことを勧めるわけです。

これをやりましてから、子どもたちの受け入れ方が全然違ってきたそうです。たとえば「手を洗う」学習一つを取り上げても、先の報告が真実なら、今までなら十パーセントしか吸収されない学習が六十五パーセント吸収される学習になるわけですから、受け入れ方が違ってきていることがはっきりとわかります。ですから、漢字教育をしている幼稚園の子どもと、そうでない幼稚園の子どもとでは、しつけがまったく違ってきているという報告がたくさん私のところに寄せられています。

たとえばこういうこともあります。動物園に遠足に行きます。翌日大抵その絵を画かせますが、そのとき、「昨日動物園に行って楽しかったねえ。何がいちばん面白かった」と子どもに尋ねます。そうすると「ぼくは象が面白かった」とか、「私は猿が面白かった」とか、さまざまなことを言います。そのときに、「あ、象さんがいたね」と言いながら「象」という字を黒板に書き、「そう、猿さんもいたね」と言って「猿」という字を書く。それから、「さあ、それでは昨日の面白かったことを絵にしましょうね」と言って画かせますと、ただ会話だけでやっていたときと、話題を漢字で書くようになってからとではその結果が違うというのです。

象という言葉と一緒に「象」が書かれ、猿という言葉と一緒に「猿」が書かれますと、子どもたちはたちまちその字を覚えてしまいます。ですから、黒板を見さえすれば、「あ、象がいたっけ、猿がいたっけ、熊もいたぞ」と、昨日の経験が呼びさまされ、考え考え画くようになるわけです。漢字教育をやるようになってから、幼児の画く絵の内容が違ってきたそうです。

話をもとに戻しますと、そういうわけで、幼稚園では特に漢字を教えるということを意識しないように勧めています。意識しない方がむしろ効果が上がるし、それに使っていれば子どもの方は自然にこれを覚えてしまうからです。そういうやり方をしています。

個性がなく覚えにくい仮名

小堀（桂）　その場合、仮名よりも漢字の方が効果があるということですか。

石井　はい、そうなんです。仮名の場合は、漢字ほどのまとまった図形にならないのです。仮名で書かれた言葉は、個性がなく、みんな同じように見えるものです。たとえば幼稚園や学校の下駄箱などに



仮名で名前を貼りつけていますが、自分のところがはっきり覚えられるまでに、大体一週間はかかるのが普通です。ところが、それを漢字にしますと、一目で覚えてしまいます。これは私が小学校で教えておりましたときに実験を何回もしましたが、漢字で書かれた名前はひと目でぱっとわかるのですが、仮名だとなかなか見つかりません。

小堀（桂）　私はそれと似た経験をしているのです。コンピューターか何かの関係だと思いますが、最近は学生の名簿が漢字の名簿ではなくて仮名の名簿を渡されます。ところが、仮名の名簿をもらったクラスは、どうも学生が生き生きとした人間となって浮んでこず、一人も覚えられないのです。

石井　それで思い出しました。ある幼稚園の園長さんが言っていたことですが、いままでは、卒業した幼児の顔が全然浮んでこなかった。ところが漢字教育をするようになって、子どもたちの名前を漢字で書くようになってから、一人一人の顔がよく覚えられるようになった、というのです。名札を見ればその子どもの顔が鮮やかに浮ぶし、子どもの顔を見ればその子の名前も思い浮ぶのだそうです。漢字教育をするようになってから、子どもとの 関係が非常に良くなったと言って喜んでいました。

幼稚園における漢字教育

森岡　狼少年などの例もありますけれども、言葉は必要な時期に覚えそこなうと、ものになりませんね。いまのお話を伺いまして、漢字を早期に教える方が能率の上がるということはよくわかるのですけれども、幼稚園の大体何歳くらいのところが漢字指導の適齢期に当たるのでしょうか。また、漢字教育をしている幼稚園では、いま何字ぐらいを目標にしているのでしょうか。

石井　幼稚園によって、三年保育、二年保育、一年保育があり、私はその種類によって段階をつけています。大体一年間に三百字程度――小学六年生は百九十字ですからずいぶん多いですけれども――は覚えてしまいます。

森岡　三年保育ですと……。

石井　一千字くらいですね。一千字覚えますと、いまの中学生以上です。ですから本を読む力はものすごく出てきます。湯川秀樹さんの伝記を読みますと、三歳の頃におじいさんから『四書五経』を教わって、後年非常に自分のためになったとありましたので、一般にどの程度にやれるものか、いま私の研究所で幼児に実験的に『論語』を教えていますが、もう非常に興味をもって覚えますし、すらすらと読みますね。

森岡　日本の国語教育ですと、漢字は文章の中に出てきたときに教えるやり方をとっておりますね。それに対して「鳥」のはいっている字を集めるとかして漢字だけを教える方法があると思いますが、どっちが能率が上がるのでしょうか。

石井　単に漢字そのものを覚えるという点からは、漢字だけでやる方が能率がいいと思います。しかし、一概にどちらが良いとは言えないと思います。

森岡　さっきのお話の「手を洗う」の場合、このやり方ですと文脈の中で教えるということですね。

石井　そうですね。

森岡　その他に、虫偏とか、同じ偏のつくものだけ集めて教えられることもあるのですか。

石井　そういうこともやっております。ただその場合、最初に「虫」という字は教えません。「蟻」とか「蜂」とか、そういう具体的なものから教えます。「虫」という虫はいませんし、「鳥」という鳥はいませんので、幼児には理解しにくいものです。いままではそういう字から教えていましたけれども、私は逆だと思います。

森岡　つまり字形の複雑なものからですね。それから、いま伺っていますと具体的なものの名前の字がいっぱい出てきますけれども、抽象的な動詞や形容詞はいつごろからお教えになるのでしょう。

石井　ある程度名詞が覚えられるようになりますと、もうどんどん文章にはいります。私が監修している幼稚園の教材に花園文庫という漢字絵本がありまして、毎月一回出すのですが、「舌切り雀」だとか「かちがち山」の物語が一冊ごとに収まっています。名詞がある程度覚えられるようになりますと、その言葉を使った物語を与えてやりますと、子どもは前後の関係で教えなくても読むのです。たとえば「嵐」という字がわかっていると、「嵐が起こりました」と結構読むのです。最初はもちろんそういう物語を読んで聞かせるわけです。何回か読んで聞かせますと、幼児は文章を覚える力が非常に強くて、

物語をそらんじてしまいます。そらんじてしまいますと、難しいはずの仮名でもいつの間にか覚えてしまいます。ですから最初は具体的な漢字を教えますけれども、ある程度までいきますと、文章をいきなり与えます。どんどん楽しんで読みますから、自分で字を覚えるようになります。

森岡　幼稚園で書くこともなさるのですか。

石井　いまのところ、書くことはしておりません。ですが、三年保育の場合などは、見ておりますと絵でも何でも実に見事に画くのです。それで幼稚図によっては筆で字を書かせているところがあります。それは見事な字を書きます。ですから、そういう指導もやった方がいいと私は思っています。それも鉛筆ではなく筆でやりますと、子どもは喜んでそれは見事に書きます。

森岡　もう一つだけ。高学年で漢字を教えるのは何歳ぐらいからだと無駄だとお思いですか。(笑)

石井　いやあ、それは私は無駄はないと思います。私のような年になっても、しかも漢字を専門にしていても、読めない字、わからない字がありますからね。私はそれは一生の問題だと思いますから、終りはないと思います。

低学年でもっと漢字を

森岡　学年ごとに教える字が決まっていまして、小学校では四年生がいちばん重くなっているのですが、それはむしろ一年生の方に重点を置いて教える方がいいということはお考えですか。

石井　ええ。実は昭和三十六年に、私は『私の漢字教室』という本を刊行してそれまでの実験を報告したのですが、その後も文部省に低学年ほどいいということを進言してきました。それで指導要領の改訂のたびに漢字学習の山が低学年の方に寄ってきてはいます。しかしこれは、文部省のある方から聞いた話ですが、現場からのものすごい反対があって、容易なことではないということです。

鈴木　亡くなられた時実利彦先生のお話では、空間認識が先に発達し、時間認識は遅れて発達するということです。ですから当然幼児にとって図式認識はやさしく、数字であるとか時間であるとかは難しいわけです。昨日と今日と明日、ましてあさってなどというのはどうしても子どもは理解することができない。本当を言うと、一、二、三、四という数字などというのは、時間の系列になるので、よくわかるようになるのは十歳頃からだということです。その頃になってようやく抽象的な思考が可能になってくるわけです。空間認識が非常に発達するときに、しかも記憶力がいいときに漢字をたくさん教えるの

は、脳生理学から見ても合っているのです。日本における戦後教育の間違いは、小学一年に社会科だとか理科を教え、国語の時間を少なくしたことだと思います。中国は低学年ほど教える漢字の数は多いのでしたね。

石井　ええ、そうです。

鈴木　三百五十くらいをいっぺんに教えますね。そして上に行くほど少なくなっている。この方がずっと脳生理学から言えば合理的だと、時実先生はおっしゃっています。

スチュアート　しかし、中国はいまどんどん略字になってきているでしょう。

石井　そうなんですよ。たとえば大事な偏を取り去って、それで簡略化したとしているけれども、それではその漢字の意味の手がかりを失うことになってしまいます。私は愚劣な行為だと思いますね。

スチュアート　アメリカで漢字を教えている例をお出しになりましたけれども、もし漢字がお話のような役割を持つのであれば、漢字を守る日本の役目はたいへん大きいことになりますね。（笑）

石井　おそらく中国の人たちは中国の古典が読めなくなると思いますね。

鈴木　最近日本のおっちょこちょいが、中国の略字に日本の漢字を合わせようとする運動をやり始めていますが、これは問題ですね。

日本語と脳の構造

市原　この間あるところで石井さんのお話を伺ったのですが、石井さん、ちょっとあのお話をなさっていただけませんか。

石井　あ、そうですか。これは私の研究ではないのですが、東京医科歯科大学の角田忠信さんが「サイエンス」に報告されたものなのです。もう『日本人の脳』という本になって出ていますけれども、人間というのは左の脳で言語を受け取り、右の脳でそれ以外の音声を受け取る仕組になっているのだそうです。ところが角田さんが調べたところによると、日本人だけが鳥の声や虫の音を、言葉を聞く方、つまり左の脳で聞いているというのです。さらに調べてみると、これは日本人の先天的な構造によるのではなくて、日本語を母国語にしているものに限るのだそうです。ですから両親が日本人であってもアメリカで生まれアメリカで育った子どもは、やはり右の脳で鳥や虫の音を聞いているそうです。そして日本人でなくても日本で育って日本語を母国語のように語っているものは、やはり左の脳で聞いていると

いいます。ということは、日本語が脳の構造を変えているということなのです。

それで、ここからは私の想像になるのですが、日本語が人間の脳構造を変えるというのが科学的事実だとするならば、日本語のどういうところがそうさせるのか、日本語と外国語とを比較してみればわかるのではないかと思うわけです。いちばん違う点はどういうところか。たとえば私はアメリカの方に対して自分を名のるときに、「イサオ・イシイ」と言いますが、こういうふうに相手の立場に立って相手の名のり方で自分を名のるのは、おそらく世界で日本人以外にないのではないかと思うのですが、いかがでしょう。毛沢東も自分を「沢東・毛」とは言わないと聞きました。そういうことが一つあるように思います。

それから、自分を表現するのに相手の立場に立って表現する、つまり、自分の子どもに対して自分を「お父さん」と言い、「私」とは言わないということかあります。甥や姪には「おじちゃん」と言い、孫に対しては「おじいちゃん」、生徒に対しては「先生」というふうに自分のことを言っています。いつでも相手の立場に立って、そのつど言葉を選んで使っているわけです。

そういうところが、鳥や虫の音を聞く場合にも及んでいるのではないかと思うのです。冬が近づいてくると、こおろぎの鳴く音を聞いても、「つづれさせすそさせ」と、友だちが自分に語りかけているかのような面持で聞く。何でも心情的にそれに同化してしまう。それが日本語の特徴であり、日本人の脳の構造を変えてきた所以ではないのかと考えます。

言葉に対する感覚

小堀（杏）　有名な数学者の広中平祐さんがテレビでおっしゃっていたのですが、たいへん感激したことがございます。以前私は、数学というのはおよそ芸術とは反対で、天才の閃きみたいなものは不必要だし、ただ理詰のもののように感じていました。それでいつか緒方富雄先生が天才的なもののない数学者ほど面白くないものはないとおっしゃったのを伺って、非常に私は教えられるところがありました。広中さんも、数学者にとっていちばん大切なのは感覚だとおっしゃるのです。たとえば、大学の入学試験の数学は、どんな数学者でもすぐには解けないような難しい問題がたくさんありますけれども、それでも考えれば最後には解ける、しかし大学を出て一人前の数学者になってから何がいちばん大切かというと、それは感覚だとおっしゃるわけです。

私もまったく同感でして、人間にとっていちばん大切なのは感覚だと思います。たとえば当用漢字・新仮名づかいは、視覚と聴覚とを完全に無視した制度だと私は思うのですけれども、一つの例として「薔薇」と「バラ」の違いを見てもおわかりになるでしょう。「薔薇」は、花びらが複雑にたたまって、いい匂いがぱあっとしてくるように感じます。ところが「バラ」ですと、どうしてもバラバラ事件を連想してしまいます。感覚というのは、もっと高められるべきものではないかと思うのです。ですから、一番感覚が鋭敏な幼児のときが大事なのですね。中勘助さんは、三つのときにおばさんに百人一首を毎日毎日教えられて、それをいつの間にかそらんじてしまうというのがありましたね。「立わかれ　いなばの山の　峯におふる　まつとしきかば　今かへりこむ」と教えられるわけですが、そのときやはり旧仮名でなくてはいけないのです。「おうる」や「かえりこん」では駄目なのです。感覚が鋭くいかないのです。私の孫なんかを見ていますと、そういう美的感覚を育むことがまったく無視されていて、その点で明治に生れて非常に幸福だったと思います。世の中のありとあらゆるもの、政治でも経済でも、最後は感覚に決定権があるのだということを、この頃つくづく思います。

石井　岡潔先生も同じようなことをおっしゃっていましたね。

体系的・論理的漢字学習法

鈴木　数学は情緒だと言われましたね。話は変わりますが、以前石井さんは、小学校で子どもたちに漢字を印刷した紙を平仮名の教科書に貼り付けさせて教えていらっしゃいましたね。

石井　ええ。いまもそれをやっている小学校が二つあります。小学校の教科書は、特に一年生のものは仮名だけになっていますけれども、たとえば「がっこう」とあるところには「学校」という漢字をガリ版で印刷し、それを小さく切って貼り付けるのです。この作業はかなり時間もかかるしたいへんなのですが、しかし、そ を貼り付けたときにはもう国語の指導をする必要がなくなっているのです。理解の仕方が「学校」と「がっこう」とではまるっきり違うのです。

たとえば、よく例にあげるのですけれども、「時間」と「時刻」との違いについて、一年生から二年生にかけて教えるように指導書に書いてあります。ところが、「時間と時刻とはこういうふうな区別があって、これらは間違いやすいから注意しなさい」と言った先生が、遠足のときになりますと、「遠足の集合時間は八時三十分、時間を間違えないように」なんて言っているわけです。実は、私もそれをやった一人なのですが、私の場合は即座に子どもから、「先生、八時三十分は時刻でしょう」とぴしゃり

とやられまして、（笑）「あ、そうだ」と思いました。漢字で教えれば、一年生の子どもでも、先生が間違った言葉を使おうものならぴしゃっとやれるだけの力を持つようになるのです。平仮名で「じかん」と「じこく」を区別せよと言ったって、これでは理解のしようがないですね。「講堂」と「校舎」の「こう」の違いだってわかるはずがありません。ですから、私は漢字で書き表すことによって、奥深いところまで理解できるようになるし、言葉に対する感覚も鋭くなっていくのだと思います。

小堀（桂）　さきほど森岡さんもご質問になりましたが、具体的な概念から抽象的な概念、特に動詞概念に進んでいくのには、漢字は本当に有利だと私も思います。確かヒントは石井さんがお書きになったものからだったと思いますが、ある子どもに、「冓」はものがつながり行き交うことを表わし、それに三水をつけると水が行き交うから「溝」、言偏をつけると言葉でそれをやるから、人に「講」ずる、木偏をつけると木が左右に組み合わさって「構」えになる、と教えまして、それでは、「貝」はお金の意味だということを知っているから、「冓」に貝偏をつけるとどういうこと になると聞きましたら、やはり当たるのです。最初は「どぶ」という具体的な概念しかなかったのが、そういうことを通じて「購買」、つまりものの売（賣）り買いという意味だとわかるのです。何かが流通する、行き交うという抽象的な概念がわかってしまっているわけです。その際、女偏に「冓」というのは、さすがにちょっとはばかりがあるから教えませんでしたけれども……。（笑）

石井　おっしゃる通りです。私は五、六年生の子どもにそういうやり方をしたことがあるのですが、考えさせますとやはり当たりますね、五、六年生あたりはそういう指導が絶対に必要で、私はそれを体系的・論理的漢字学習法と呼んでいます。

小堀（桂）　ちょっと気になることですが、その場合、新字体で教えられたのですか。

石井　ええ、新字体です。新字体ですと理解しにくいのですけれども、もう仕方がないのです。亡くなられた時枝誠記先生もおっしゃっていましたけれども、実際は、文字を改良することは結局より複雑化していることになるのですね。どんなにいい道かわからないけれども、道を作れば作るほど複雑になるのですから……。

小堀（桂）　抵抗のしようがなくて困っています。結局新字体を作ったことによって記憶の負担が二倍になっただけですね。

ハングル化の進む韓国の場合

鈴木　石井さんのおっしゃったこととまったく逆なことをやったのが韓国ではないかと思います。実は四月になって一週間ばかり、招かれて韓国に行って参りましたが、驚いたことには、ソウルをはじめどこに行きましても九九パーセントまでハングルなのです。漢字を探し出すのが難しいくらいです。それからついでに言うと、東京なんかと違って、ローマ字の看板はまったくありません。案内して下さった方に、どうしてハングルがそんなに徹底したのか聞きますと、我々もうすうす感じてはいたことですが、戦後の韓国ナショナリズムによってハングル化を始めた結果、そうなったのだそうです。漢字はずいぶん長い間教えなかったわけです。それで、「三十年もハングルばかりやっていると思考法が非常に変わって困るのではないか」と聞きましたら、それがいいのだと言われるのです。この方は日本で生まれて東大を出て、ドイツのチュービンゲン大学へ五年も留学していた人ですから、たいへんなインテレクチュアルです。どうしてかと聞きましたら、その人はこういうことをおっしゃるのです。「漢字は目にぱっとはいるから、感覚的に受け入れることになり、従来論理的にものを構成していく力が非常に弱かったのは、そのためである。ハングルでは全部組み立ててやらなければいけないので、思考方法が論理的になり、その点で非常によくなった。やはりハングルをやっていくべきだ。いまの若い人たちは日本の小説などもハングルで読み、その感想文を見ると驚くべき深い捉え方をしている」というわけです。

「あなたの国や中国の古典、あなた方と我々との共同の文化的遺産を読みこなせない人間が出てくるのではありませんか」と言いましたら、「いや、それは翻訳すればいい」というわけで、どうしても平行線になってしまうのです。帰国してからいろいろ考えてみますと、日本も平安朝の女性文学は仮名ですし、ずっと下って会津八一（秋艸道人）の歌も漢字が一つもないですね。そういうのは一体どう違うのだろうかと最近考えさせられているのですが……。

石井　しかし、ものごとを推理したり論理的に考えたりするのは、幼児期に漢字をやったかどうかでずいぶん違ってくると思います。たとえば、「整」という字は英語の辞書を引きますと、'to put things in order' となっています。order に当たるのは「正」、things に当たるのは「束」、put に当たるのは「攵」です。漢字は複雑だと言われますけれども、こういう具合に組み立てられているのです。木を集めて一つにまとめたのが「束」であり、「攵」は手に棒を持っているかたちを表わしています。ですから、手に棒を持って牛に向かえば「牧」になり、世の中を正しくするために権力をふるえば「政」に

なる、それを子どもにふるえば「教」になるわけです。束をこしらえれば必ずでこぼこができるわけで、そこを棒でたたいてきちんとする。「正」という字も、足の裏を表わす「止」に「一」が合わさったもので、足のとどまるべきところにちゃんと置くことを表わしています。それが「整」なのです。漢字というものはすべてこういう具合に論理的な仕組を持っているのです。それを理解すると、「整」は単に正しくするという意味ばかりでなく、不整になっているところを人為的に力を加えてそろえる意味があるというところまでわかるわけです。そういうことは、やはり単に音声を表わすだけの文字でやったのでは不可能だと思いますね。

市原　たいへん面白い質疑応答がございまして、もう予定の時刻が過ぎたくらいでございます。きょうは皆さん、どうもありがとうございました。

（日本文化会議「月例懇談会収録集」昭和五十三年六月）